
朝山家の長男のとある物語

クラウディ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

朝山家の長男のとある物語

【Nコード】

N1044R

【作者名】

クラウディ

【あらすじ】

この日本のどこかに毎日賑やかな家がある。
賑やかな家こと「朝山家」のことにはブラコン気味な姉妹と主夫っぽい長男がいる。

そしてこれはその朝山家の出来事を書いている小説です。

第一話：朝の恒例行事（前書き）

ということでは新小説です。

更新頻度はかなりばらつくと思いますが、ご鼻屑に願います。

第一話：朝の恒例行事

俺がいつも起きるのは早朝だ。理由は俺が家族の朝飯をすべて作るから。

母さんは仕事の都合で居たり居なかったり、父さんは俺が幼い頃にはすでに離婚していなかった。

父さんとはたまに連絡をとっている

そして俺には姉貴が二人と妹が二人いる。

まあ姉貴は二人ともまともに料理ができないし妹達に包丁で怪我はしてほしくないから必然的に料理係は俺に回ってくるんだがな。

おっと、俺の名前を言い忘れていたな。俺は朝山宗佑だ。あさやまそうすけ

高校1年をしていて姉貴二人と妹二人のちょうど真ん中が俺の立ち位置だ。

「ととつ、もうこんな時間か。そろそろみんな起こしてメシの時間だな」

そう言つて俺はまず長女の部屋に向かった。

名前は朝山葵。あさやまあおいこの家じゃ一番勉強のできる才女だな。

髪は肩まで伸ばしていて背は高く美人。いわゆる才色兼備ってヤツなのかな？

ちなみに23才で職業は弁護士をしている。

俺は葵ねえの部屋の前に来てノックをして部屋に入る。

「葵ねえ。もう起きてる？」

「ああ。今起きた」

俺が葵ねえを見ると確かに起きたところだった。

いつもならもう起きてたりするので昨日は仕事が少し長引いたのだろ。

「そう。じゃあ朝飯できてるから着替えて降りてきてね」

「分かった。宗佑にはいつも迷惑をかけるな」

「別に大丈夫だよ。葵ねえは仕事をがんばってるんだから」

「そ、そうか？まあ…ありがとな」

「どういたしまして。じゃあ俺は三人を起こしてくる」

そう言っただけ俺は部屋を出て正面の部屋のドアをノックしてドアを少し開けて頭だけ部屋に入れる。

この部屋の主は次女の朝山美咲^{あさやまみさき}がいる。

顔は整っておりツリ目で髪は腰の辺りまで伸ばしてポニーテールにしている。背も葵ねえより少し低いが十分高い。年は18で高校3年だ。

少し暴力的で八つ当たりはなぜか全部俺に降りかかってきた。いきなり頬をつねられるわ関節技をかけられるわ…。とにかく俺にとっては一種の恐怖だ。

「美咲ねえ起きてる？」

「起きてる。もしかして朝ご飯できたのか？」

「できてるから早く降りてきてね」

「…なあ、もうちょっとないのか？」

いきなり美咲ねえの声色が変わった。
なんと言つか…とても不機嫌な感じた。

「別になにもないよ。冷めるから早く降りてきてね」

「………… バカ。宗佑なんてどっかいつちまえ！」

「痛っ！いきなり目覚ましを投げるなよ…」

俺はこれ以上怪我をしたくないので早めに部屋を出る。

そして横にある俺の部屋の反対側にある部屋のドアを静かに開けて中に入る。

この部屋は三女と四女と一緒に過ごしている。

三女が朝山凛あさやまりんで四女が朝山夕菜あさやまゆなという名前だ。

凛は中学生にしては大人びた顔立ちで短めのポニーテールが特徴だ。そして最近クールになっていて少し寂しい。ちなみに14才で中二だ。

夕菜の方はまだ幼い顔立ちで肩を少し超えるぐらいまで髪を伸ばしている。夕菜は俺にまだ懐いてくれている。こっちは13才で中一。俺にとってはこの子たちが唯一この家で癒しの存在だ。

「おい二人とも。朝だから起きろ」

「んむう…。あとちょっと…」

「うう…おはようございましゅ…」

「夕菜はおはよう。凛は起きないと遅刻するぞ」

「分かったわよ。着替えるから出てって」

「じゃーねー。またリビングで」

「おう。なるべく早くな」

そう言っただけで俺は部屋を出てリビングに向かった。

リビングには先にご飯を食べている葵ねえと俺を見て威嚇してくる美咲ねえがいた。

こうして見ていると姉妹でもかなり違いがあるなぁと改めて思う。

「遅かったな。また凜が駄々でもこねたか？」

「いや、それは大丈夫だよ。それより美咲ねえは食べないの？」

「食べる！でも宗佑を見ているとムカつく！」

「そう。ならご飯と味噌汁を入れてくる」

俺は美咲ねえの発言を少し無視して四人分のご飯と味噌汁を用意した。

味噌汁は葵ねえが温めなおしてくれたので早く器によそうことができた。

よそった辺りで妹二人も降りてきたのでまず二人分の用意を置いて運んだ。

「はい、ご飯と味噌汁。鰯の開きは暖める？」

「別にいいよ。時間ないし」

「私もいいよ。冷めたときに味がはつきりするしね」

「そうか。なら大丈夫だな。」「おい。アタシのご飯と味噌汁が無いのは嫌がらせか?」美咲ねえは年上なんだからちよつとは待ってよ」

「アタシの方が早く居ただろ!」なら自分でやれ。ガスの扱いぐら
いはできるだろ?」「う、うるせえ!」

美咲ねえが俺の頬をつねりにきたので俺はお盆でその手をガードし
た。

さすがに数年間に渡ってされたらガードぐらいはできる。

「く、くそー! 弟のクセにナマイキだ!」

「はいはい。なら今からご飯と味噌汁取ってくるから」

これ以上時間を使うと遅刻すると思ったので、俺はもう二人分のご
飯と味噌汁を取ってきた。

そしてまだキれている美咲ねえの所に置いて俺も食べ始めた。

「あ、そういえば。みんなの弁当をキッチンに置きっぱなしだ」

「そうか、なら各自で家を出るときに取ればいいさ。宗佑は食べる
といい」

「あ、うん。ありがとう」

「ねえねえそーちゃん。今日のお弁当はなあに?」

俺がもう一度席に座りなおすと夕菜が話しかけてきた。

しかも話題が今日の昼食って…、これで太らないのが不思議だ。

「それは昼になってからのお楽しみさ。それより中学の方はそろそろ出たほうがいいんじゃないか？」

「そうだね。ごちそうさま、おいしかったよ」

「ふえ！？ま、待ってよ凜ちゃん！」

「あんま慌ててコケたりするなよ」

「それは夕菜にだけ言ってよね。いつてきます」

「じゃ、じゃーねー！いつてきまーす！」

そう言っただけ凜は冷静に学校に向かい、夕菜はバタバタと慌てながら学校に行った。

俺たちの家は高校はそれなりに近くて中学の方が遠いので必然的にこのようになる。

てか食べてるだけなのに美咲ねえの視線が怖い。

「美咲ねえ、なにを俺に伝えてるのさ。俺にはお前をシバくとしてしか受け取れてないけど」

「まったくもってその通りだ。今すぐシバきたい」

「美咲は少し落ち着け。宗佑もあまり美咲を逆立てるな」

「そうだね。ごめん葵ねえ」

「……………なんで葵には従順なんだよ……」

「ん？美咲ねえなにか言った？」

「…なんでもない！」

「そう？一応今日は美咲ねえの好きなメニューにしたんだけど」

「なんで朝飯に繋がるんだよ。……まあ好きだけど」

「そりゃよかった。ごちそうさま、じゃあ戸締りは頼むね」

「ああ。任せておけ」

「あ、ちよつと待てよ！アタシも行く！」

「じゃあ玄関で待つてるから。なるべく早くね」

そう言い残して俺は弁当を取って玄関に向かった。
そして靴を履き終わったときに美咲ねえも鞆を取ってきて玄関にきた。

「弁当はいれたの？」

「大丈夫だ。アタシの方が年上なんだから子ども扱いするな」

「分かったよ、なら行こうか。てか急がないと遅刻だし」

「それは早く言え！ほら！早く行くぞ！」

こうして俺は美咲ねえと学校に向かった。
ちなみに学校には遅刻せずについた。

第一話：朝の恒例行事（後書き）

どうでしょうか？

私もオリジナルは初めてなのでよく分からない…。

ご指摘等あれば感想に書いてください。

第二話：波乱の昼食（前書き）

と言っわけで二話目です。

もしよければ感想の方もよろしくです。

第二話：波乱の昼食

俺と美咲ねえは俺が引つ張られる形でダッシュで登校して遅刻せずに登校できた。

それより片腕引つ張られながら登校したせいでかなり肩がダルい…。

「はあ…明日からは余裕をもって家を出よう。そうしよう」

「おー宗たん、今日は遅かったね。もしかしてまた姉妹関連？」

今話しかけてきたのはこのクラスの委員長こと七海真央だ。ななみまお

いつもニコニコしていて、髪は短くカットして前髪をピンで留めている。

明るい性格で楽天的なのに成績優秀・文武両道でオマケに可愛いという誰もが羨む完璧超人だ。

今日も元気にアホ毛が揺れているな。なら七海は今日も元気だ。

「宗佑たん言うな。てか、なんで俺が遅れたらそうなるんだ。…その通りだが」

「やっぱりね。まあこの私はちゃんと心配してたんだからね！」

そついい終わると七海はなにかを期待した目で俺を見つめていた。金をボツたくられてもイヤだからとりあえず別の話題を振ろうか。

「んで、お前は俺になんの用だ。ちなみに宿題ならもう出したぞ」

「んもー！せつかく超絶美少女の真央ちゃんが話しかけたのにー！」

「自分で言うな。てか騒ぐな。ただでさえ俺はお前のファンクラブに睨まれてんだから…」

「にしし！君みたいな鈍感少年は制裁を受ければいいのだよ」

「鈍感とは失敬な。俺のように何もしなくてもウワサが入ってくる奴はそうそういないぞ？」

「やっぱり鈍感じゃん」

まったく…、何回も失礼な奴だな。

そしてそのまま俺と七海はそのままチャイムがなるまで話した。そのまま面倒な授業の前半が終わり、昼飯の時間になった。

「さて、俺もメシ食うか」

「おーい朝山。お前の姉ちゃんが呼んでるぞ」

「美咲ねえか？この時間だと飯の誘いか」

俺はクラス男子Aに呼ばれたままにクラスの扉まで行った。

すると家の中では見せないぐらい笑顔の美咲ねえがいた。なんか一周回って怖い…。

「遅いじゃねえか。さ、屋上で食べようぜ」

「お、おう。てかなんでそんなに機嫌がいいんだ？」

「そうか？別に普通だろ」

「（いやいや。明らかに上機嫌だ）まあいいや。じゃあ行け」「宗たん！一緒に食べよ！」「宗たん言うな」

「いいじゃん宗たん！おろ？その人はだあれ？」

「そういえば七海は知らなかったな。俺の姉ちゃんの朝山美咲だよ」

「そうなんだ。初めまして美咲センパイ！このクラスの委員長の七海真央です！」

「……ああ。よろしく……」

なんか目に見えて美咲ねえの機嫌が悪くなってるな……。

……なぜだ？どこに怒らせるフラグが？

「んで、七海は俺に何の用だったんだ？」

「そうそう。一緒に食べよう」

「それ、それは無理だ。宗佑はアタシと食べるからな」最後まで言わせてよ」

「むう……別にいいじゃん。ねー宗たん？」

「まあ先客は美咲ねえだからな。今回は諦めてくれ」

「むむっ！ということは新しいライバル登場か！」

「なに言ってるんだよ。まあいいや。じゃあ行こうか」

「ああ。…帰ったら覚悟しろよ」

怖っ！？美咲ねえ怖っ！？

しかも家に帰ってからってリアルすぎる…！

俺がそんな葛藤をしているともう屋上に着いてしまった。

「さ、さあ。早く食べようよ」

「それよりやけに親しかったな。あの…七海だったか？」

「まあ委員長だしね…。時間ないし食べよ？」

「ま、いつか。今日の弁当はなんだ？」

「昨日はスーパーが安売りしてたから買いこんだので作ったんだけど…、おいしい？」

「うん、おいしい。宗佑はますます主夫に近づいていくな」

うつ、地味に人が気にしていることを…。

まあ人に食べてもらっておいしいって言われて悪い気はしないからやってるんだけどね。

「葵ねえも美咲ねえも忙しいし凜と夕菜には怪我してほしくないからね。俺は別に嫌いじゃないし」

「ふうん。それよりも屋上は誰も居ないな」

「本来ここは立ち入り禁止だよ？もしかして知らなかったの？」

「し、知ってた！知ってたからな！」

「分かったから！分かったから殴るな！」

ふう…まったく。怒ったと思ったら笑ったり納得したり大変な人だな…。

まあそれでも憎めないのは慣れたからか？まあそんなとこだな。そしてそのまま雑談をしながら食べていると予鈴が鳴った。

「もう時間になっちゃったか。さて、教室に帰るか」

「じゃ、また家に帰ったら覚えとけよ」

「覚えてたか…。具体的にはなにをされるんでしょうか？」

「そうだなあ…、今日は一緒に寝るとか？」

「それはカンベンしてください！！」

「ヤダね。ふふふ…今日は覚悟しろよ…」

「はあ…なんでこうなったんだ…」

俺はそのまま悩みながら屋上を後にした。

途中で階段を踏み外しそうになったので考えるのをやめて自分のクラスまで行った。

そして今日の授業中は美咲ねえの部屋からの脱出法を考えて、先生の話がほとんど頭に入ってこなかった。

第二話：波乱の昼食（後書き）

オリジナルは難しい…

資料がない手探りの状態は何でも難しいですね。
では、次回もよろしくです。

第三話：波乱は夕食にも続く…（前書き）

今回はタイトル通り前回の続きです。

次回は次の日にいけると思っています。

第三話：波乱は夕食にも続く…

学校の授業も終わり、俺は夕食の買い物をして帰路についていた。とりあえず一緒に寝ると言う提案の打開策は俺が逃げると言う選択肢は三倍でボコられるのでやめた。残された選択肢は美咲ねえが忘れるしかなかった。

「はあ…晩飯食って忘れてくれればいいのに…」

「あ、そーちゃん！今帰ってるの？」

「夕菜か。じゃあ凜もいるんだな」

「悪かったわね、私も一緒にいて」

「悪くないよ。それより二人は帰りか？」

「うん。凜ちゃんを待ってたんだ」

そついや凜は生徒会委員だったな。

なるほど、生徒会の会議を待ってたなら遅れるな。

「そつか。相変わらず凜は真面目ちゃんだな」

「ちょっと…！いきなり頭撫でないでよ…」

「あーいいなー。私も私も」

「ほれほれ」。って、そろそろ帰ってメシ作らねえと」

「えー。もつともつと」

「また後でやってやるから。そろそろ家に帰るぞ」

「私は元々そのつもりよ」

「れっつー!」

こうして俺たち三人は家に向かい歩みを進めた。

途中で夕菜が今日の晩飯を尋問のように聞いてきたのはある意味怖かった。

そんなこんなで俺たちは自宅に着いた。

「ふう…。さてと、今日は時間もあるしカレーを作るか」

「えっ!? 私が聞いたときはお魚って言うってたじゃん!」

「あれは嘘だ。正直あのときは何作るか考えてなかった」

「ヒドイよー! 私の純情を弄ぶなんて!」

「夕菜。人聞きが悪いからやめてくれ…」

「でも兄さんならやりかねませんよ。少なくとも私はそう思います」

「凜もひでえなあ…。まあいいや、そろそろ作り始めるか」

そう言っただけはキッチンに入って料理を始めた。

作ってるときに葵ねえも帰ってきたので今日も晩飯は母さん以外揃

った。

そしてカレーも煮込み終わって、みんなで食べているときに波乱は再び俺を襲った。

「なあ宗佑、お前約束を忘れてないよな」

「（覚えてたか…。とりあえず惚けるか）約束？俺なんか約束したっけ？」

「宗佑は忘れてもアタシは覚えてるからな。惚けても無駄だ」

「はあ… やっぱ無理だったか…。ちゃんと覚えてるよ」

「約束？宗佑は美咲になにかしたのか？」

「うん。なんでそうなったか分からないけど今日の夜は美咲ねえと一緒に寝ることになったんだよ」

俺が約束の内容を言った瞬間。周りの温度が3 下がったと思う。そして葵ねえはスプーンをかなりの力で握り締め、凜は無言の圧力を俺にかけてきて、夕菜はガツガツとやけ食いを始めた。美咲ねえだけはなぜか勝者の風格を漂わせている。

「宗佑。お前も年頃だし美咲と一緒に寝るのはどうかと思うぞ」

「ウ、ウン。ソウデスネ…」

はつきり言おう。怖い。

笑顔は引きつってるしスプーンはもう曲がっている。その状態で冷静に注意されると怖い。

「そーちゃん！おかわり！大盛りで！」

「お、おう。そんな勢いで皿を出さなくても…」

「早く！そーちゃんは私の純情を弄んだんだから！それでチャラに
してあげる！」

ヤバイ…。葵ねえの血管が切れそうだ…。

と言うよりなんで夕菜まで火に油じゃなくてガソリンをぶちまけた
んだ！

ほら見る。葵ねえに掴まれている俺の右手首が悲鳴をあげそうじゃ
ないか！

「宗佑？お前はいつの間にそんな奴になったんだ？」

「葵ねえ…痛いです…。手首を離してくださいませんか？」

「駄目だ。宗佑はちゃんと話しておかないといけないからな」

「いや…それと手首は関係ないんじゃない？」

「ん？宗佑はいい子だよな？お姉ちゃんに反論しないよな？」

「……………はい」

駄目だ。怖すぎる。

これ以上被害が拡大しないためには俺の手首には犠牲になってもら
おう。

「じゃあ今から私の部屋に來い。ちゃんと話をしよう」

「……………はい。分かりました」

そして俺は手首をガシツと捕まれたまま葵ねえの部屋に連行された。

「お、じゃあな。今日の夜のことを忘れるなよ」

美咲ねえ。これ以上油を注がないでくれ。

「さようなら。兄さん」

せめて夕菜の発言に対して説明して欲しかったなあ。マジで。

「あー！せめてご飯だけでも入れてけー！」

ゴメン。さすがに俺は今ピンチだから自分でやってくれ。

そして三人の言葉を最後に俺は葵ねえの部屋と言つ名の尋問部屋に連行された。

「イスは二人分無いからベッドに座ってくれ」

「う、うん。それで何をされるのでしょうか？」

「なあと簡単さ。真実を話してくれればいい」

駄目だ…。リビングでのやり取りは全て真実だ…。

さて、俺は生き残るために何をすればいいんだろうか…。

「まずは美咲の部屋と一緒に寝ると言うことだが本当か？」

「は、はい。本当であります」

「ん？よく聞こえなかったな。もう一回言ってくれ」

「いや、だから本当だ」すまない。もう一回言ってくれ」…本当に、す？」

「宗佑。嘘はいけないぞ。さあ、本当のことを言ってくれ」

そう言つと葵ねえは俺の肩をガシツと掴んだ。

ヤバイ。肩は手首よりヤバイぞ。

ここは嘘でもいいから合わせないと…。

「う、嘘…です」

「やっぱりな。宗佑は昔から私にベツタリだからな。私以外とはありえん」

「（ベツタリ？そんなつもりはないんだが…）そ、そうだね」

「じゃあ夕菜の件は本当か？」

休む暇もないとはこのことだな…。

さて、まだ肩が犠牲になっているからヘタなことは言えないな。

「あれは夕菜の過剰な表現と言うか…」

「過剰？ならそれ以下のことはしたんだな？」

ヤバイ…、俺の肩が外れて軟体生物になってしまっ…！

「してないしてない！！」

「そうか。本当のことを話してくれてありがとう」

「どういたしまして？じゃリビングに戻ろうよ」

「そうだな。……………これで美咲の策略は阻止できた」

「ん？どうかしたの？」

「なんでもない。それでは行こうか」

こうして俺への尋問は終わった。

そして俺は何事も無かったように装ってリビングに戻った。

「遅かったな。カレー冷めてるぞ」

「うん。別に食べれるから大丈夫だよ」

「そうか。…なんなら食べさせてやろうか？」

ふう…神様は俺を殺したいのか？

またリビングを離れる前の状態に戻ったじゃないか。
ただ違うのは凜が自室に戻ったということだけだ。

「い、いいよ。一人で食べれるから」

「そうか…。ならアタシは部屋に戻るな」

「うん。じゃあね」

「風呂入ったら来いよ！待ってるからな！」

そう言って美咲ねえは自室に戻っていった。

そして俺も食べ終わったので流し台に皿を置いて自室に戻った。
もう洗い物は明日でいいや…。

「ふう…やべえ。メシ食っただけなのに疲れた」

俺は部屋に戻ったらドツと疲れが出たのでベッドで横になった。
すると疲れと満腹感で気付いたら寝てしまった。

第三話：波乱は夕食にも続く…（後書き）

なんだか葵がヤンデレっぽくなったなあ…。
次回は登場していない朝倉家のお母さんを出したいなあ。

第四話・朝山家の母（前書き）

と言うことで四話目は母親の登場です。

最近はこちらの方が発想が浮かぶのはなぜ…？

第四話：朝山家の母

俺は昨日の晩飯の後はすぐに寝てしまったようだ…。

都合がよく今日は休日なので学校に遅刻するようなことはなかった。休日はみんながみんな自由に行動するので朝ご飯は作らない。作るのは昼と夜だけで済むのは俺にとっては楽だ。

「あ、昨日の分の洗い物と洗濯をしないと…」

俺は思い出したので体を起こした。

すると左腕だけに重さを感じたので見てみると…。

「すう…すう…ううゝ、まだ食べれるよゝ」

「なにやってんだ夕菜…。起きろ、起きろって」

「うみゆ？あ、おはよーそーちゃん」

「おはよう。そして夕菜はなにやってるんだ？」

「そーちゃんと一緒に寝たかったの。美咲お姉ちゃんばかりズルい！」

あ…昨日の約束守れなかったなあ…。

今日美咲ねえに何されるんだろ…。

「とりあえず離れてくれ。着替えてから残ってる家事をしたい」

「むう…。じゃあ私も部屋に戻るよ…」

「そうだ。朝ご飯は昨日のカレーで我慢してくれ」

「分かった。じゃーにー」

そう言っただけで夕菜は俺の部屋を出て行った。

俺もベッドからそもそもそと出てから着替えを持って風呂場に向かった。

「はあ…さすがに汗かいたまま寝たら気持ち悪いな…」

「ふう…すっきりした…」

ああ、なんてことだ。

まさか浴室の廊下で美咲ねえと出くわすなんて…
ヤバいなあ…俺の人生もここまでかあ…

「や、やあ。おはよう美咲ねえ」

「……………なんで」

「え？もう一回言って「なんで昨日は部屋に来なかった？」そ、それは…」

「まあ大体検討はつくが、宗佑の口からちゃんと聞きたくてな」

「じ、実は疲れと満腹感でベッドに横になっただけで寝てたんだ」

俺が理由を言うと美咲ねえはいきなり抱きついてきた。

ヤバい…このままジャーマンスープレックスに繋がれたら避けられな

い…

「よかった…！別に嫌いじゃないんだな！？」

「う、うん。嫌いじゃないよ」

「よかった！よかった〜！」

「ちょ、ちょ！苦しいです…！」

一体どこからそんなパワーが出てるんだ…！
それに美咲ねえの胸が当たってる…！
意識するな俺！心頭滅却して煩惱をぶっ潰せ！

「ほう…昨日注意したばかりなのにな…」

「あ、葵ねえ！？これは…その…」

「葵には関係ねえだろ！アタシと宗佑は約束の確認をしてただけだ
！」

絶望的すぎる…。

この状態を打破する策は存在しないだろう。
もう俺は処刑を待つしかないのか…。

「うるさいですよ。廊下で騒がないでください」

「り、凜？降りてきたのか？」

「当たり前です。廊下で騒いでいたらそりゃあ起きますよ」

「ついでに私もいるよ〜！」

「夕菜もか！？てかお前はノリが軽いな！」

なんだか混沌としてきたぞ！？

そしてこのまま話し合いになっていると葵ねえの提案で全員リビングで話し合うことになった。

俺たち五人がリビングについて混沌とした話し合いを続けていると玄関の扉が開いた。

そして玄関を開いた人物がゆっくりとリビングの扉を開いた。

「ただいま〜。お母さんが帰ってきたわよお〜」

「……おかえりっ！！……」

なんかすげえ可哀想だな…。

ほれ見る。もう涙腺が崩壊しかけてるじゃないか。

「そーすけえ…なんか娘達が怖いよお…」

「ははは…。よしよし」

俺たち朝山家の母である朝山遥はインテリアデザイナーで家にはあまり帰ってこない。あさやまはるか

容姿は一言で言うところの若い。実年齢は四十はいつてるのに若く見える。髪は腰まで伸びた髪をそのままにしている、言動はなんだか幼い印象がある。

ちなみに怒るとメツチャ怖い。それと背が低い。

「むふう…そーすけの手は安心するよお…」

「ははは…。なんだか子供とさほど変わらないなあ…」

「あ、ひどおい。さすがに子供じゃないよお」

「はいはい。いい子いい子」

ヤバい。なんだか癒されるわあ…。

最近癒し成分が少なかった分余計に癒されるわあ…。でも他の四人の視線がすげえ怖いわあ…。

「はふう…仕事疲れが一気に消し飛ぶう…」

「お母さん。今は大事な話をしているので宗佑から離れてください」

「えー、葵ちゃんのけちんぼ」

「その意見には賛成だ。宗佑から離れろ」

「そうです。お母さんでもさすがに空気を読んでください」

「そーだよ！そーちゃんは皆のものだー！」

「うう…お母さん…グスツ、空気読めるもん…」

はあ…なんだか余計にややこしくなったな。

四人が怒って母さんは泣いて俺のシャツが涙と鼻水でぐしゃぐしゃになるし…。

なんだか散々な休日だ…。

第四話：朝山家の母（後書き）

今回は短めです。

遂に朝山家のお母さんの遙さんができました。

それとなんだかハーレム度合いがすごいことになったので、タイトルの方を変更しました。

第五話：一時休戦？（前書き）

最近は疲れて眠くなる…。
更新は不定期になるかも…。

第五話：一時休戦？

休日の大半を使った話し合いは午後六時を持って一時休戦？となった。

とりあえず今のところは話が進まないままやや険悪な状態が続いている。

「……………」

「と、とりあえず何か食べる？このまま険悪なままじゃ嫌だしさ…」

「……………宗佑！」「……………」

「カニバリズム！？俺は食われたくないよ！！」

「……………チツ……………！！」「……………」

もしかして俺って嫌われてるんだろうか…？

まさか何か食べるって聞いたら俺って答えがくるとは…………。

「じゃ、じゃあ何かあったら呼んでくれよ。俺は部屋に帰ってるからさ」

「えー、そーすけが居ないとやだ」

すみません母さん。俺にはこの空気は耐えられないんです。

「やだって言ったって俺が居たところでなにも変わらないだろうしさ」

「じゃあお母さんもそーすけの部屋に行くう」

「分かった…って！違う！」「やったあ」ちよつと！聞いてる！？」

これじゃあ何言っても聞いてくれそうにないな…。
しょうがない。母さんも部屋に連れて行くか…。

「じゃあ俺とついでに母さんは部屋にいるk」「ちよつと待て宗佑」
…なんでしょうか葵ねえ」

「なに自然な感じでお母さんを部屋に連れ込もうとしてるんだ」

「別に連れ込んでるわけじゃない気が…」

「いや、連れ込んでるな。葵の意見にアタシは賛成だ」

「姉さんたちの意見に私も賛成よ」

「私も」

ん？なんかデジャブってないか？

この会話はどこかで聞いた気がする。

「ぶーぶー。別に葵ちゃんたちはいつも宗佑といるからいいじゃないの」

「だからと言って許せません。どうせお母さんは宗佑と添い寝とか考えてるんでしょ？」

「ぎくっ！やっぱり葵ちゃんにはバレちゃったか…」

「なんだと！？それは許せん！まずその特権はアタシにある…！」

「美咲姉さんの約束は昨日でしょう？なら今日は約束の翌日よ」

「なんだと…！姉にそんな屁理屈を言うとはナマイキだぞ！」

「ナマイキでも構わないわ」

「このヤロー！妹のクセにー！」

なんか再び混沌としてきた…。

唯一タ菜だけが机の上で居眠りしている。全く、自由な奴だな…。

「とりあえず全員落ち着け。まずは何で言い合ってるんだ？」

「美咲が宗佑に抱きついていたらから注意したんだろう。昨日も注意したのに懲りてないようだしな」

「（注意？あれは脅迫に見えたんだが…）まあそれについては俺が謝るって言うので許してくれない？」

「む、むう…宗佑に言われたんじゃ仕方ない。今日のところは許してやる」

「ありがと葵ねえ。じゃあこの問題は解決ってことでいい？」

「アタシと一緒に寝るって言うのが解決してないぞ」

これは一番難しい問題だな…。

こればかりは選択をミスすると振り出しに戻るからなあ…。

「うみゆ…なに話してるの？」

「夕菜か。まあちょっと美味ねえの問題を解決してるとこだ」

「一緒に寝るってやつ？」

「そうそう。どうすれば解決できると思う？」

俺がそう聞くと夕菜は腕を組んで考えるそぶりをした後、なにか思いついたのかいきなり目を見開いた。

「そーだよ！そーちゃんが交代でみんなと一緒に寝ればいいんだよ
！！」

「「「そうか！その手があつた！」「」「」

「いや待て！それは俺に色々ヤバイ！！」

「じゃあみんなもそれで賛成？」

「「「賛成だ（だよ）」「」「」

「俺の意見は無視か！？無視なのか！？」

そして俺の意見は聞くどころか無視されてこの問題は解決した。
ちよっと待てよ。俺の理性とか理性とか理性がヤバイ…。

「じゃあ明日からで順番は年上から年下の順でいいね？」

「お母さんは一番だ〜。やた〜」

「まあいいだろう。どうせ全員に回ってくるんだからな」

「そうだな。だが、宗佑が誰を気に入るかは恨みっこなしだぞ」

「美咲姉さんこそ、そう言っただけで恨まないでくださいよ」

「それは凜ちゃんにも言えるよ〜。凜ちゃん結構恨みっ子だもん」

「うう…これからは落ち着かない夜が続くのかあ…」

こうして俺たちは数時間かけて悩んでいた問題を解決した。

まあ俺だけは新たな問題を抱えているんだが…。

俺たちは久しぶりに家族で晩飯を食った後に各自が明日に備えて眠りに付いた。

第五話：一時休戦？（後書き）

と言っわけで次回から宗佑の眠れぬ夜がスタートします。
では、次回もよろしくお願いします。

第六話：宗佑の眠れぬ夜／朝山遙の場合／（前書き）

と言っわけで今回からは眠れぬ夜がスタートです。
とりあえず今後の展開は自分でも分かりません。

第六話：宗佑の眠れぬ夜／朝山遙の場合

一日のほとんどを使つた大会議は夕菜の意見で一瞬で解決した。そして俺の意見を見殺した案は可決され、遂にその案が適用される日がきてしまった。

つまりはあの会議の翌日だ。そして今俺は学校で三時間目の勉強をしている。

「はあ…最近はため息が増えたな…」

「朝山。俺の授業でため息たあ…、覚悟はできてるんだよね？」

「できてません」

今授業をしている先生は元・暴走族とウワサの遠藤先生だ。このゆとりの時代に鉄拳制裁をするほどの度胸がある先生だが親からの信頼は厚く、訴えられないのはすごいと思う。

「そうか。できてないか。だが関係ない」

「いだあ！？…理不尽だ」

「理不尽など関係あるか。じゃあ続きを始めるぞー」

こうして何事も無かつたように授業は再開された。あーいつてえなあ…。コブができてないのにいてえ…。そして強烈な一撃を受けた俺は真面目に授業を受けることにした。

長い授業も終わり、俺は今帰路についている。

今日の晩飯の材料は買い込んでるので問題ない。

それより問題は今日の夜だ。母さんは晩飯を食い終わると同時に俺を拉致するだろう。

しかも抵抗できないぐらいの力で引っ張るから逃げる事ができないと予想する。

「まあいいか。どうせ俺が早く寝ればいいんだし」

俺はプラス思考に考えて家に帰った。

家に帰ると玄関で母さんが出迎えてくれた。

「おかえりい。待つてたよお」

「ただいま母さん。今から晩飯作るからもうちょっと待つててね」

「はあ。い。今日の夜は楽しみだねえ」

「俺は微妙だよ」

「ぶう…、ひどいよお…」

俺はスネている母さんを玄関に置いてキッチンに向かった。

せめてもの反撃のつもりか、母さんは料理をしてる間ずっと俺に貼り付いていた。

おかげで腕と足の力を使って筋肉痛になりそうだ。

「はあ…はあ…、ねえ母さん。そろそろ離れてくれない？」

「いやー」

「…そうすか。はあ…疲れる…」

疲れるがここで母さんを無理やり剥がすと今度はおんぶになりかねない…。

俺は体に張り付いてる母さんを気にしないようにして料理を続けた。てか息子に張り付く母親って大丈夫か？常識的に。

「よしできた。母さんはみんなを呼んできて」

「分かった。みんなおいで。ご飯だよ」

母さんがみんなを呼ぶとみんながリビングに集まった。

それよりのほろんとしたあの声でみんなが集まるのは凄いな…。

そして久しぶりに家族でご飯を食べていると俺の携帯が鳴った。

俺はリビングから廊下に出て電話に出た。

「ん？誰だろ。もしもし？」

《よっ、元気してるか？》

「なんだ、父さんか。一体どうしたの？」

電話の主は朝山家の元・大黒柱である朝山大吾^{あさやまだいし}だった。

俺が物心ついたぐらいの時に離婚して、母さんに電話をかけると着信拒否設定をされた可哀想な男だ。

母さんの言いつけで俺たちも着信拒否にしているが、俺だけ父さん

に家の電話で近所に呼び出されて土下座で着信拒否しないでくれと頼まれたので携帯に連絡がくる。

《なんだとはつれないな。どうだ、みんな元気にやってるか?》

「普通に元気でやってるよ。それで本題はなに?」

《やっぱ気付いていたか。実はお前に頼みたいことがあってな》

「頼みたいこと?」

《実は今猛烈に寂しくてなあ…。母さんの風呂に入ってる時の写メを送ってくれ》

「一回死んでください」

そう言っただけ俺は電話を一方的に切った。

すると一秒も満たないスピードで携帯に連絡が入った。

「もしもし。着信拒否にしたいと思います」

《すまなかった!だから着信拒否はやめてくれ!》

「はあ…、じゃあ本当の用件はなんなんですか?」

《あれも本題なんだがな。まあ妥協して娘達の風呂d「さようなら」ごめんなさい!切らないでください!》

「次変なことを言ったら本気で着信拒否にするからな」

《はい。分かってます。じゃあ母さんの寝顔ならいいですか?》

「まあ…それならいいか。じゃあいつか送るよ」

《恩に着る!じゃあ写メがくるまで待つてるからな!全裸で!》

「服を着る変態が。じゃあね」

こうしてバカ親父との電話は終わった。

まったく…、顔はいいんだからもつと真面目になればいいのに。
俺は廊下からリビングに戻って自分の席に座った。

「誰からの電話だったんだ?なんだか怒っていたように見えたが」

「あ、うん。父sじゃなくて、クラスの友達からだったよ」

「ん?そうか。なら冷める前に食べるといい」

「うん。気を使ってくれてありがとう」

「かまわないさ。この家の家事は宗佑がやってくれてるんだ。姉としてはこのぐらいはな」

「うん。ありがとう」

そう言っただけ俺は飯を食べ始めた。

はあ…今思えば母さんの寝顔なんてどうすりゃいいんだ…。

「…」
「うちそーさん」

「美咲ねえもう食べたの？」

「ああ。じゃあな」

なんだか最近美咲ねえは不機嫌だなあ…。

食べ終わってからモイライラしながら部屋に戻ってたし…。

それからみんなが食べ終わって俺が洗い物をしているとまた母さんが張り付いてきた。

リビングでテレビを見ていた凜と夕菜から殺気に似たものを感じたのは気のせいだろう。うん。

「よし。これで洗い物は終わりだな」

「やった。じゃあお風呂行こ！」

「まだ早いよ。それにまだ沸かしてないし」

「じゃあ沸かしてよ」

「はいはい。じゃあ離れてくれない？」

「やー」

「やーって言ったってなあ…」

結局このまま風呂を沸かしてリビングのソファでくつろいだ。

そのときはさすがにどいてくれたので助かった。

まあ右に夕菜、左に母さんがピツタリと付いていたので怖かった…。そして風呂が沸いてみんなが入った後に俺は入った。

「ふう…もしかしたら風呂が一番落ち着くかも…」

俺はまさか浴室でブレイクタイムを過ごす日が来るとは…。まあコ
ーヒーはないけどね。

少し休息を楽しんだ後に俺は体と頭を洗って浴室を出た。
そして寝る服であるＴシャツとジャージを着て廊下に出るといきな
り水月を強打されてどこかに拉致られた。

「うぐう…、いつてえなあ…」

「待ってたよ。さ、早く寝よう！」

「母さん？もしかして俺を殴ったのも？」

「うん！あの人と喧嘩になったとき用に覚えてたんだよ」

父さん…哀れだな…。

おそらくあの人の正体は父さんだろう。

喧嘩になるたびに水月をボコボコに殴られたのにまだ好きって…。

「そ、そうなんだ…。…ああいつてえ」

「ささ、早く寝転んで！」

「ちょ、待って！のわっ！？」

俺はいきなり腕を掴まれて合気道のごとくベッドに投げられた。
なんでこんな技を覚えてるんだよ…。あ、そうか。あのバカ親父の
せいか…。

そして俺は抵抗もできないまま母さんの抱き枕状態になった。

「むふう…そーすけあつたかあい」

「そりゃ風呂に入ったとこだからな。俺は逆に暑い」

「お母さんそーすけと再婚しよつかなく」

「無理だよ。それなら父さんと再婚しなよ」

「え？今なんて言つたの？そーすけ？」

「ヤバーい。やつちやつたー」。

もしかしたら押しちゃいけないスイッチを全力で押したかもなー。
てか抱きしめられてる左腕がきしんでるー」。

「……なんでもないです」

「だよなー。そーすけからあの人の名前が出てくるはずがないもん
ねー」

「ですよー。じゃあそろそろ寝てもいいかな？」

「うん、いいよー。……むふふ、寝たら私の天下だよ……」

さっき聞こえた不穏な言葉は聞こえなかったことにしよう。

それに俺が寝たふりしてれば仕事疲れて母さんが寝るだろうし。

そして数十分がたったとき、俺は目が冴えているが母さんは熟睡していた。

「くくくく…。にゅふふ…」

「さて、これだけ寝れば写メ撮って大丈夫だな」

俺は携帯のライトをオンにして手早く写メを撮って父さんに送った。そして今度は数秒で父さんから感謝の言葉が数十行に渡って書かれたメールが届いた。

俺はそれを流し気味に見て携帯を閉じ、寝る体制に入った。俺も疲れていたのか目と閉じるとゆっくりと眠りに付いた。

おまけ

「にゅふふ」。隠れてお母さんの寝顔を撮るなんて可愛いなあ」

私はそう言ってそーすけの腕にギュッと抱きついた。そしてどんな顔をしていたのかを見るためにそーすけの携帯を開いてみた。

「うーんと。データフォルダに…ないよ!？」

私はそーすけのデータフォルダとSDカードの画像データをすべて見た。

でも私の寝顔を写している画像は一件も無かった。

「むむっ！もしか今日の夜ご飯のときに話してたクラスの子に送ったのかな!」

私は宗佑のメールフォルダを開いて見てみた。
すると一番上には一番むかむかする名前が表示されていた。

「朝山大吾」

向こうの浮気が原因のクセに会いたいと言ってきたバカだ。
もう私にはそーすけがいるからいいもん！

「でもそーすけは秘密で連絡を取り合ってたんだ……。しかも着信件
数もバカの方が多い！！」

私は思わずそーすけの携帯電話を握り締めてしまった。
携帯からピキッて音がしたのはしょうがないんだよ。

「まあ会ってないならいいや。でもそーすけには報いを受けてもら
わないとね」

そう言っただけはそーすけの携帯でバカを着信拒否に設定した。
さて、明日も休みだけど早く寝よつと。

第六話：宗佑の眠れぬ夜／朝山遙の場合／（後書き）

なんだこりゃ。

正直自分でなにを書いているのかが分からなくなってきました。
ということで次回も宗佑の眠れぬ夜編です。

第七話：宗佑の眠れぬ夜／朝山葵の場合／（前書き）

活動報告にも書きましたが、一万アクセス超えててビビりました。いつも見てくださっている方には本当に感謝です。

第七話：宗佑の眠れぬ夜／朝山葵の場合

俺はいつも通りに携帯のアラームに起こされて目覚めた。

そして起き上がろうとすると腹の上に何かが乗っているので途中でベッドに倒れてしまった。

乗っているものの正体を確かめるために首を下に向けると母さんが俺の腹の上で寝ていた。

「はあ…昨日は妙に寝苦しいと思ったら…。あらら、ヨダレがたれてるし…」

とりあえず着替えて弁当を作るか。朝食はトーストでいいや。

俺は母さんをどけてベッドに再度寝かした後に自分の部屋に戻った。そして制服に着替えると階段を下りてリビングにあるキッチンで弁当を作り始めた。

すると誰かが階段を下りてきたようで、リビングの扉が開かれた。

「おはよう兄さん」

「ん？凜がこの時間に起きるなんて珍しいな。おはよう」

「余計なお世話です。ね、ねえ兄さん、姉さん達はまだ起きてないの？」

俺は凜を見ると珍しくそわそわとしていた。

俺たち以外は起きてないことを知らせると凜は安堵のため息を吐いた。

な、なんだ？なんか凜がしおらしいな…。

「ねえ兄さん。ちょっとこっちに来て」

「お、おう。どうしたんだ？」

俺が凜に呼ばれてそばに行ってみると、いきなり凜が抱きついてきた。

「な、な、なにしてんだ!？」

「なにつて抱きついてるんです。……姉さんばかりズルいんだもん」

「ちょ、ちよつと待て!気持ちが落ち着かん!」

すると追い討ちをかけるごとく凜は頭を俺の胸にグリグリと押し付けてきた。

ヤバいっすよ。心なしか抱きしめる力も強くなってるし…。

「ふう…あつたかい」

「と、とりあえずなんでこんなことを？」

「だ、だって……みんなが起きてると恥ずかしいし」

恥ずかしい? まあ凜はあまりスキンシップはしてこないしな。まあ別に家族だし遠慮することは無いと思うんだけど…。

「まあいいや。俺は別に大丈夫だからいつでもいいんだがな」

「…うん。ありがと兄さん」

そう言うと凜はしばらくそのまま抱きついていた。

そして数分たった後に凜は顔を真っ赤にして二階に走っていった。

うんうん。なんか新鮮だ。

「あ、そうだ。弁当作らないとな」

こうして俺は再び弁当作りに戻った。

そこからはいつも通りみんなを起こして朝食を食べて学校に向かった。

朝食のときの葵ねえの視線が妙に怖かったのは気のせいなんだろうか…？

学校の授業も半分終わり今は昼食の時間になった。

今日は美咲ねえは来なかったので委員長こと七海と一緒に食べている。

まあ半分強制的って感じだけだな。

「宗たん寝不足？目の下にうつすら隈できてるよ」

「そうか？別に俺は眠くないんだが」

「ふうん。ねえもう一個聞きたいんだけどいい？」

「珍しいな。いつもならプライバシーなんて気にせず聞いてくるのに」

「うるさいやい。でね、聞きたいことなんだけど。なんで宗たんから女の子の匂いがするの？」

俺は持っていた箸を落としてしまった。

幸い机の上だからいいんだが、まさか凜が抱きついたときにうつったのか？

だがものの数分だ。いくらなんでもそれはないだろう。

「なに言ってたんだ？そんなに匂うか？」

「うっん、別にそんなに匂わないよ。でも私は嗅覚には自信があるのだよ」

「お前は警察犬か。つまらんこと言っていないで食え」

「ぶう…私にとってはつまらないことじゃないもん」

「はいはい。早く食わないと昼休みが終わるぞ」

「もー！無愛想な宗たんにはこうしてくれる！」

そう言って七海は俺にヘッドロックをかけてきた。

ヤバイ…コイツ本気で落とす気だ…。

俺は降参の印として七海をトントんと叩いた。

すると七海はいきなり技を解いて数センチ後ろに下がってしまった。

「はあ…はあ…、どうした七海？」

「そ、宗たんてばダイタンだね…。いきなり私のむ、む、胸を触る

なんて…」

「え？俺もしかして腕じゃなくて胸を触ったのか？」

「う、うん」

「す、すまん！俺は腕を叩いたつもりだったんだが…！」

こういうときはどうすればいいんだ！？

女の子に恥をかかせたままじゃ男としてダメだろう…。

よし、俺は代償としてパシリでもなんでもいいからしよう。そうじゃないと俺が責任で押しつぶされそうだ…。

「七海。すまなかった！侘びに俺はなんでもしよう。パシリでも土下座でもなんでもいい」

「…え？私の言う事なら何でも聞くの？」

「ああ、でもできるだけ現実的な事で頼む」

「じゃ、じゃあ今週の日曜日に一緒に出かけよ。詳しくはメールで送るから」

「ああ、でもそれでいいのか？それじゃ罰則にならない気が…」

「いいの！宗さんは私の言う事を聞いて！」

「りよ、了解です！」

そう言くと七海は廊下へ全速疾走していった。

…もう授業が始まるんだがな。

結局七海は六時間目の中盤まで帰ってこなかった。

それに授業中も俺をチラッと見た後に顔をそらすと言うことを繰り返して、俺は全然落ち着くことができずに授業を受けた。

なにもないまま学校が終わって俺は帰っていた。

結局七海は最後まで落ち着かないで、学校が終わるとともにダッシュで帰宅していた。

俺も帰宅部でなにもすることがないので家に直行している。

そしてなにもなく家についた俺は玄関の鍵を開けて家の中に入った。

「そーすけえ…おなかすいたあ…」

玄関には空腹で倒れている母さんが居た。

「はあ！？なにやってるんだよ母さん！昼食なら自分でも作れるだろ！」

「だってえ…そーすけのが食べたいんだもん…」

「はあ…なにやってんだよ。じゃあ手早く晩飯作るから待ってて」

俺は急いでキッチンに向かって料理を始めた。

手早く作れるってことで今日は野菜炒めと卵のスープだ。勿論スープは粉末スープだ。

「母さん出来たよ。お茶碗持ってきて、ご飯よそうから」

「はぁい。あ、ちゃんと多めに盛ってね」

「はいはい。ちゃんとよく噛んで食べなよ」

母さんはイスに座ると野菜炒めとスープをガツガツ食べた。
はぁ…なんで自分で作って食べようと思わないんだ…。

俺が調理器具を洗っていると玄関が開いた音がした。

そして足音はこちらに近づいてきて、リビングの扉も開いた。

「ただいま。…母さんはもつと落ち着いてください」

「ふぁっふえおいふいんふぁふぉん（訳：だっておいしいんだもん）」

「おかえり葵ねえ。ちょっと早いけど食べる？」

「いや、私は後でいい。仕事の残りを家に持ってきたんだ」

「そう。じゃあ後でコーヒーでも持って行くよ」

「ああ。ありがとう宗佑」

そう言って葵ねえは階段を登って自分の部屋へ戻っていった。

さて、時間もあるしインスタントじゃなくてドリップで淹れるか。

「そーすけ！おかわり！」

「はいはい。…って、それぐらい自分で「いやー！」「…もういいや」

俺は母さんのおかわりをよそい、ドリップコーヒーの調子を見てみると美咲ねえに凜、夕菜も帰ってきた。

そしてみんなのご飯をよそったりしているとコーヒーが完成したので、階段を登って葵ねえの部屋に向かった。

そして途中でコケることもなく部屋の扉の前にたどり着いた。

「葵ねえ？ コーヒーできたから入っていい？」

「ああ。入っていいぞ」

俺は扉を開けて部屋に入った。

俺にとっては少し恐怖の記憶がある部屋だが綺麗に片付いている。

「はい。まだ熱いから気をつけてね」

「ありがとう宗佑。…ん？ インスタントじゃないのか？」

「ちょっと時間があつたからドリップで淹れてみたんだけど…もしかしておいしくなかった？」

「いや、おいしいぞ。宗佑は昔から気が利くな」

「まあ俺はこれぐらいしか出来ないし。じゃあ俺は戻るね」

「待て、今日の約束は覚えているか？」

あー、すっかり忘れてたなあ…。

とりあえず選択肢もないし普通に答えるか。

「覚えてたよ。……まあ少し怖いけど」

「怖い？宗佑は私に恐怖心を抱いているのか？」

地獄耳なの忘れてた…。

しかもいつの間にか俺の肩をがっしり掴んでるし…。

「どうなんだ宗佑？ん？」

「怖くないよ…。でも、ちょっと肩が痛いかな？」

「そうだよな。宗佑が私に恐怖心を抱くわけないよな」

「うんうん。抱くわけないよ」

「じゃあ私と一緒に寝るよな？」

「うん。一応これは決定事項っぽいしね」

「じゃあ寝るぞ。着替えは私のシャツを使つといい」

ん？なんか話がそれてないか？

しかも俺は下パンツで上がシャツっておかしくない？

「いやいや、せめて下にジャージを…」

「ダメだ。じゃあ私も寝るから我慢しろ」

「いやいや、我慢以前に服をください」

「ダメだと言ってるだろう。拒否するなら実力行使だ」

そう言つと葵ねえは肩を掴んでいる手でそのままベッドに俺を倒した。

しかも逃げようとしたときにマウントポジションを取られて逃げられなくなった。

「あ、葵ねえ？マウントポジションは緊張するんですが…」

「関係ない。さあ目を閉じれば時期に眠くなる」

俺は恐怖のあまり目を閉じた。

なんだか最近では美咲ねえより葵ねえの方が怖い…。

すると俺は本能のレベルで察知したのかすぐに眠ってしまった。

おまけ

「ふふつ、やつと寝たか。まったくいつまでも可愛い奴だな」

そう言つて私は宗佑の頬を撫でた。

男にしては綺麗な肌で、撫でているとこっちが癒される。

「いつから私はこんなに惹かれたんだろうな…。今思えば昔から気遣いがうれしかったな」

私がイライラしていると聞いてくれたり、疲れていると甘いものを持ってきてくれたり…。

本当に私にはもったいない弟だ…。

「んむう…やめろお、いやマジで…俺は七海ほど食えん…」

「七海？聞いたことのない名前だな…」

「いやいや…、お前は女だからいいが…いやぁ甘いものばかりい…」

「ほほう…宗佑は夢の中では他の女と遊んでるんだな…」

私が今無性に腹が立っているのは好きだからだろう。

だが家の中でも会えると言うメリットがある以上私は七海とやらないは負けないだろう。

私はそう思うことにして、宗佑を抱き枕にして就寝した。

第七話：宗佑の眠れぬ夜／朝山葵の場合／（後書き）

この話を書いてる途中にPCがフリーズして悲鳴をあげました。
今覚えれば近所の住民の方には多大な迷惑をかけたなあ…。

感想やご指摘のほうも待ってますのでよろしくです。

第八話：宗佑の眠れぬ夜／朝山美咲の場合（前書き）

この話で眠れぬ夜は半分です。

実際この眠れぬ夜編が終わってから七海との約束しか考えてない

：

第八話：宗佑の眠れぬ夜／朝山美咲の場合

俺はいつもの習慣になっているのか、アラーム無しで早朝に起きた。多分俺の部屋では携帯がピロピロとうるさく鳴っているだろう。

「あゝ、ダルいなあ……。ていうか体が重い……」

「む？起きたか。今は朝の六時だから寝てていいぞ」

「いや、俺は弁当を作らないと……」

「さつき体が重いと言っていただろう。一応体温計で計っておけ」

「ん、分かった。計り終わったら朝ご飯作るよ」

そう言っただけ俺は体温計で計りながら寝ぼけた目をこすった。すると視界がはつきりとして、最初に見えたのは葵ねえの下着だった。

「はえっ！？ああ葵ねえ！なんで下着をベッドの上に！？」

「ああ、すまない。昨日は風呂に入らず寝てしまったからな。風呂に入ろうと思い出しておいたんだ」

「じゃ、じゃあ仕方ないな」「ピピピッ！ピピピッ！」「体温計に助けられた……？」

「お、もう計り終わったか。さて、何度だった……」

言葉を言い終わる前に葵ねえは体温計を手に固まってしまった。

ん？なんで固まったんだ？もしかしてそんなに高熱だったのかな…？

「ね、ねえ葵ねえ？どうしてこれ以上動くな！安静にして眠れ！」
「は、はひい！！」

「まさか…。これなら休ませるか…。私は仕事があるし母さんも今日仕事か…」

「あ、あの…。俺は平気だしそんなに高熱じゃない気がする…」

「宗佑。お前は37.8度が高熱じゃないと言っのか？」

マジすか。いやいやマジすか！？

なんでそんなに熱が出てるんだよ！俺は雨に降られたままで過ごしたのか？

「とりあえず今日は休め、学校に連絡は入れる。不本意だが美咲に看病を頼むから安心しろ」

「そう？じゃあ迷惑はかけたくないし部屋に戻るよ。朝ご飯は食パンを焼いてくれる？」

「分かった。くれぐれも死ぬなよ、死んだら私は後を追うからな」

「怖いこと言わないでよ…」

俺は葵ねえに重い責任を投げつけられた後に自分の部屋に戻った。そう言えば今日は美咲ねえが看病してくれるんだっけ？…大丈夫かな？

俺はそう思いつつ自分の部屋に入り、ジャージとＴシャツに着替え
てベッドに寝転んだ。

「ふう…もしかして寝るときのこの格好が原因か？それとも過労か
？……まあ早く治したいし寝るか」

そう言うてなにもすることなく俺は眠りに付いた。

俺はよっぽど疲れていたのか、かなりぐっすりと眠れそうだ…。

だが、気持ちよく眠れそうになっていると俺の腹にもの凄い鈍痛が
襲い掛かってきた。

「宗佑！カゼだって！？大丈夫なのか！！」

「げふう…。美咲ねえ…ちよつとどいて…」

「あ、ごめん…。大丈夫だったか？」

あら？なんか凜といい美咲ねえといい珍しくしおらしいな…。

しかも美咲ねえへこんでいると犬に待てをしてるみたいでちよつと
罪悪感があるな…。

まあ今度はヒジで腹を強打しないだろうし大丈夫だろう。

「大丈夫だよ。でも次からはちよつと注意してね」

「分かった。でも宗佑は大丈夫か？」

「うん。まあ熱もそんなに酷くないし、一晚寝れば大丈夫じゃない
かな？」

「そっか。そりゃ良かった！じゃあアタシとも一緒に寝れるんだな

「！」

「うゝん…？あんまり俺はオススメしないけどね。汗かくだろっし、カゼもうつるかもしれないし」

「別にいい！むしろいい！」

「むしろいい！？なんだか俺一瞬で美咲ねえが危なく見えたよ！？」

しかも俺がツツコンでる間に正面から俺に抱きついてるし…。

忙しくなくてカゼのせいか美咲ねえの胸が当たってるのがいつもより意識してるし！

心頭滅却俺！心を殺せ俺！感覚神経を消せ俺！！

「ん？どうしたんだ宗佑？」

「ナ、ナニモナイヨ。ナニモナイッタ」

「ふふっ…、もしかしてアタシに抱きしめられて意識してるのか？」

こんなときの美咲ねえの動物적直感は鋭いな！
いつもなら確立は半分ぐらいなのに…。

「…うん。お願いだからシバかないでください」

「そうか、ふふっ。宗佑は葵みたいな奴が好きだと思ったが…」

「と、とりあえず眠いから寝ていい？だから離れてくれる？」

「ヤダね。宗佑が寝るならアタシも一緒に寝る」

「はあ…、なにを言っても取り合ってくれないよね？」

「勿論だ。それに今日はアタシの番だしな」

そっか。そっいやすうだ。

まあ寝てる間は可愛いものだろうし、カゼさえ注意してくれればいいか。

そう自分を納得させると俺は横になった。

美咲ねえは俺が横になったのを見てすぐ隣に、俺の頭が自分の胸のあたりにくるように抱きしめた。

「もうなんでもいいや。おやすみ美咲ねえ」

「うん。おやすみ宗佑」

俺は美咲ねえにおやすみと言って眠りに付いた。

いい所で起きたのも手伝ってすぐに深い眠りに付くことができた。でもこんなに早く眠れたのは誰かがそばに居てくれるからかもしれないな…。

あれから何時間経ったんだろう…。

最近に変な緊張やプレッシャーで全然眠れた気がしなかったからなあ…。

このカゼは結構いい働きをしてくれたのかもしれないな。

「起きたか宗佑。もう昼になってるぞ」

「もう昼か…。じゃあ俺は昼飯作ってくるね」

「待て！あの…な。今日は特別にアタシが作ってやったからさ。…
食えー！」

「う、うん。これってお粥だよね？」

美咲ねえが突き出した器の中にはお粥が入っていた。
まさかゲテモノを作って食べるみたいな展開かと思っただけにお粥だった。

「そうだよ！…悪かったな。特別な物じゃなくて」

「いや、お粥なんて久しぶりだしちょうどよかったよ」

「そ、そうか？なら…アタシが食わせてやる！」

「いや…自分で「ダメだ！」…まあいいか」

「じゃあはい。あ〜ん」

俺は美咲ねえになされるがままにお粥を食べた。
…うん。普通にうまい。

てか、これなら隠し味入れば俺のと変わらないんじゃないか？

「どうだ？…もしかしておいしくないか？」

「いや、すげえうまい。まさか美咲ねえがこんなに料理上手だとは

思わなかったよ」

「…だって宗佑に食べさせたかったしな」

「ん？どうかした？」

「だから！宗佑に食べさせたかったんだ！」

「え…？あ、うん。…ありがとう」

面と向かって言われると照れる…。

しかも美咲ねえも顔が真っ赤だから余計に照れる…。

「ほ、ほら！もつと食べるよ！」

「うん。ってちよ、そんなに…食べん…」

「あ、ごめん！水飲めるか？」

「ふおふおふ！（訳：うんうん！）」

俺は美咲ねえから水をもらって一気に飲み干した。

若干ノドにつかえたけど口に一杯より楽になった気がする。

「…ごめん。いつも宗佑には面倒かけっぱなしだな」

「別に大丈夫だよ。それにその積極性は美咲ねえの個性なんだから」

俺がそう言つと美咲ねえは涙目になった。

そして俺にギュッと抱きかかってくる。

「うう…、そおすけえ…」

「え？え？俺なにかしたの！？」

「ありがとお…、ありがとお…」

「…うん。とりあえずどういたしまして？」

そのまま俺は美咲ねえをあやしなから時間を過ごした。

しばらくすると美咲ねえが恥ずかしくなったのか真っ赤になって離れた。

そして俺は美咲ねえに薬を貰って横になった。

「ふう…、薬が効いてきたかな？ふあ…眠い…」

「無理せずに寝ろよ。アタシはずっと居るからな」

「うん、ありがと。美咲…ねえ…」

こうして俺は再びぐっすりと眠りに付いた。

眠るまで美咲ねえが頭を撫でてくれて安心したから気持ちよく眠りにつけた。

おまけ

「もう寝たのか？宗佑はそんなに疲れてたんだな」

アタシは直感で宗佑の調子が悪いことが分かった。

最近の宗佑は色々とありすぎて疲れてる感じがあったからな。

まさか今まで練習していた料理が役に立つとは思わなかったな…。

「んむう…、ありがと…美咲ねえ」

「まだ言ってるのか。…どういたしまして」

そう言って頭を撫でると宗佑はくすぐったそうに、でもうれしそうにはにかんだ。

…こんな表情をするからホレちまうんだよ。

「…なあ宗佑。宗佑はアタシのこと好きか？」

「くう…、くう…」

「…なんてな！聞いてるわけないか。…でも、いつかホレさせてやるからな」

そう言っただけでアタシは宗佑の頬に軽くキスをして添い寝をはじめた。

…うつうつ…、やってて恥ずかしくなってきた…。

アタシは多分顔を真っ赤にしながら宗佑と一緒に眠りに付いた。

第八話：宗佑の眠れぬ夜／朝山美咲の場合（後書き）

最近はこの小説も除々に人気が出てきて、アクセス数もかなり増えてきました。

これも皆さんのおかげでございます。ありがとうございます！！
では、次回はどうか考えるのかもしれませんが！

この行き当たりばったり感もあわせてお楽しみください。

ご意見、ご感想の方も受け付けております。遠慮せずに送ってください！

第九話：宗佑の眠れぬ夜／朝山凜の場合／（前書き）

遂に凜までたどり着きました。

最近は学校の方もいそがしいのでグダグダかも…。

第九話：宗佑の眠れぬ夜／朝山凜の場合

俺は薬を飲んでからかなりの時間眠っていた。

最後に寝たのは昼過ぎごろだったから軽く十時間以上は寝てたな。だつて窓の外がうつすら明るいし。

「ふあ…。また微妙な時間に起きたな。まだ朝飯作るには早いし…」

「ん…？そおすけ？まだ早いから寝ろよお」

「いや、もう目が覚めたしね。美咲ねえは寝ててもいいよ」

「うん…。そーする…」

そう言つて美咲ねえは再び寝息をたてた。

多分美咲ねえは遅くまで俺のことを見てくれたんだろう。うつすらと目の下に隈ができてるし。

「さて、久しぶりにゆっくりした朝だし散歩でもするかな」

俺はそう思いついたのでパーカーを羽織い、携帯だけ持って外に出た。

季節は四月の下旬とは言え朝は少し冷える。

俺はここからそう遠くない公園目指して足を進めた。

「ふう…：そついや最近は忙しくて散歩なんて懐かしいな…」

俺は色々感慨にふけっていると公園に着いた。

この公園は特に印象に残るものは無い普通の公園だ。

まあベンチもあるし水道もあるからマラソンなどの練習をする人は使ってるだろう。

俺はベンチに座ってぼーっとすることにした。

「あー…、やることねえー…」

「なら走りなさいよ。運動して眠気を飛ばしなさい」

「うーっす…。…ん？アンタ誰！？」

俺は今まで後ろに人が立っていることを知らなかったので普通にビっった。

俺の独り言に返答した人物は肩を少し超えるぐらいまで伸ばした髪を後ろでまとめている女性だった。

格好はジャージにＴシャツと言うラフな格好と言うことは今までラニングでもしてたのだろう。

「びつくりするじゃない。なにいきなり叫んでるのよ」

「それは俺のセリフだ！いきなり後ろから話しかけるな！」

「男なのにチマチマうるさいわよ。男なら女性の冗談ぐらい気に止めない心構えでいなさい」

「俺はイタリア人じゃねえ。それよりアンタ誰だ？」

「アンタじゃなくて白江綾子（しらかわあやこ）よ。綾子さんともよんでちょうだい」

改めて綾子さんを見ると顔は整っており、スタイルは抜群で身長も高い。

分類的に言つと可愛いと言つより綺麗の方が近いだろう。
大人っぽいせいかラフと言つかスポーティな格好がすごく似合っている。

「どうしたの？もしかして私に見とれてた？」

「まあ…そうですね。だって普通に綺麗ですし」

「あら、素直な子ね。そっぴや君の名前はなんて言つの？」

「あ、忘れてました。俺は朝山宗佑です」

「朝山宗佑！？もしかして朝山葵の弟！？」

「はあ…そうですね…」

「こんなところで会えるなんて運命じゃない！テイクアウトで！」

「いやいや！なんで知らない人に拉致られないといけないんですか
！！」

なんで綾子さんは俺を拉致しようとしてんだ！？

いや、でも綾子さんは俺のことを知っていたよな…。

「あの…もしかしてどこかで会いました？」

「やっぱ覚えてない？葵が高二の時に一回会ってるんだけどなー」

「高二…俺は小五…葵ねえの友達？……！」

「お、気付いたみたいだね」

「もしかして俺を帰り際に拉致しようとした人!？」

これは俺の変な思い出のページだ。

俺が買い物から帰ってリビングに行くとき、葵ねえと友達と一緒に勉強をしてたんだ。

そして俺は挨拶してジュースを出した後に料理の準備をした。

その後はたびたび俺は「私の家に来ない？」と聞かれまくったはずだ。

そして極めつけは帰るときに見送りに来た俺を抱えて拉致したんだ。確かこの事件は結局葵ねえに捕まって終わったんだっけ。

「そこを覚えてたか」。まあいいわ。それにしてもまた私好みになつてゐるわね……」

「ひい！また拉致するのはやめちえっ！」

「あはは！必至すぎて噛んでるわよ。まあ拉致はしないから安心なさい」

俺はとりあえず安堵のため息を吐いた。

「まあ連絡先の交換はしてもらっただけよ。ち・な・み・に！これは強制よ」

「…拉致されるよりいいか。じゃあ俺から送りますよ」

そうして俺は綾子さんと携帯の連絡先を交換した。

俺が送ったときに一抹の不安が俺によぎったのは気のせいだと信じ

たい。

「よし、いきなりデートの連絡とかするから覚悟しなさいよ！」

そう言つて綾子さんは聞き捨てならないことを言つて公園から走つて行つた。

結構時間が経つていたようで、俺は急いで家に帰つて朝の支度を済ませた。

一番先に起きていた葵ねえに叱られたのは言つまでも無い…。

朝の久しぶりの出会い？から数時間が経つた学校の昼休みになった。余談だが一日休んで学校に行くとサボつたと勘違いされるのは恒例だろう。

話を戻して昼休み。俺はいつもと変わらず七海と弁当を食べていた。

「それで宗さんはカゼはだいじょぶ？」

「大丈夫。昨日は結構寝たからな、多分過労みたいなものだったんだろう」

「ふん…？宗たんが過労？別に過労になる原因はないんじゃない？」

「俺は家の家事をやつてるからな。多分疲れが徐々に溜まつてたんだろ」

「ほえ……。だから調理実習とかでも手際がよかつたんだね」

俺が答えた内容に七海はうんうんと頷きながら答える。

そして七海はなにかをたくらんだような顔をしてから、俺の弁当の玉子焼きを横取りした。

「あ、まあいいか。こんなことに目くじら立てたらまた熱が出る」

「ふうん、これが宗さんの玉子焼きか。どう見てもお母さんが作った熟練の技だね」

「まあ俺は料理を小学校の頃からやってるからな。熟練って言うたら熟練だ」

俺が答えている途中に七海は玉子焼きを口に入れた。

七海は一瞬目を輝かせた後、恨みの目線を俺に向けてきた。俺がなにをしたと言った。

「……私の作ったのよりもおいしいじゃん！」

「うおっ！？お前はなぜ喜びながら怒るんだ！？」

「むー！ヒドいよー！乙女のアドバンテージである料理を取るなんてー！」

「なに言ってるんだお前は。メンドクせえ奴」

「ヒドい！？もー宗たんなんか知らない！」

そう言って七海は弁当を片付けて自分の席に戻った。

そのときに俺の玉子焼きをかつさらったのは目をつむろつ。
俺は小さなため息を吐いて残った弁当を食べた。
結局七海の方が我慢できなくなったのか、「少しは心配しろー！」
と俺に殴りかかってきた。

そして学校が終わり、俺はまっすぐ家に帰って晩飯を作っている。
昨日は俺が一日中寝てたせいで晩飯は店屋物だったらしい。
ちなみに今日は麻婆豆腐とかに玉という中華を作っている。

「最近中華の素みたいなのが増えて助かる」

「いきなり何を言ってるんですか。それと豆腐は切りましたよ」

「お、ありがと。それにしても美咲ねえと凜は料理ができたんだな」
「女性にそんな質問したら殴られますよ。それに料理はできて損することはないですし」

「まあそうだよな。…よし、麻婆豆腐はこれでいいか」

「かに玉は私がやります。兄さんは治りたてなんですから休んでください」

「ごめんな。氣い使わせて」

そう言っただけ俺はエプロンを外して部屋に戻った。

部屋で充電していた携帯のライトが点滅していたので携帯を開くとメールが来ていた。

そして差出人を見ると七海からだった。

『忘れてたから連絡するよ！』

今日の日曜日のお昼に駅前で待っててね』

今日の日曜か。

そっぴやなぜ俺は一緒に出かけるので許してもらえるんだ？

うゝむ、女はミステリーとはこのことか。

その後俺は凜に呼ばれてリビングに行って食事をした。

綾子さんが教えたのか、食事中は葵ねえにずっと朝のことを質問された…。
じんもん

時は過ぎて俺は風呂に入り終わってすっきりしたところだ。

俺が洗い物をしていると凜が「お風呂の後に部屋に来てください」

と言われたので向かっている。

とは言っても階段を上がるだけなので一瞬でついた。

「凜？入っていいか？」

「は、はい！どうぞ入ってください」

俺は凜の了承をもらい凜の部屋に入った。

正確には凜と夕菜の部屋だが、夕菜は今日のところは俺の部屋で寝てもらっている。

「ようこそ兄さん。どうぞこちらへ…」

「えっ？あ、どうも…」

そう言われて俺はベッドの上に座った。

なんかやけによそよそしいな…、逆に怖いんだが…。

「あ、あの、兄さん！ちょっと両手を挙げてくれますか！？」

「お、おう。挙げるけどなんで「兄さん！」ぬおう！？」

俺が両手を挙げてばんざいをする、俺の胴に向かって凧がタツクル並みに抱きついてきた。

うれしいんだがアバラが痛いなあ…。

「はふう…兄さんの匂い…」

「ちょ、ちょっと！なにしてんの！？」

「なにって補給してるんですよ。今日は私が兄さんを独占する日なんですから」

「そうなのか？いや、でも、ん？まあ…そうなのか？」

「そうなんです。今日は兄さんは私のものです」

そう言っただけ俺は豹変した凧に戸惑いつつ腕が疲れたので下ろすついでに頭を撫でた。

すると凧は少しビクツとした後そのまま俺のひざの上に乗った。

凜は先に風呂に入っていたで頭からリンスの匂いがきて頭がかしくなりそうだ。

しかも体がくっついていて、凜の体温がそのまま感じる事ができてしまう。

「……凜。せめて隣に座ってくれ」

「嫌です。……兄さんには少しでも私を意識してもらってますから」

「またばつさり答えたな……。ふあ……」

「兄さん？もしかして眠いんですか？」

「ん？まあちよつとね。今日は微妙な時間に起きたし」

「じゃあ今日は早いですが寝ましようか。さあ、寝転んでください」

俺は言われた通りにベッドに寝転んだ。

すると凜は俺の目の前に寝転んで、背中がくっつくほど近くに來た。

「ち、近くないか？もうちよつと離れても……」

「嫌です。それに兄さんだって私のおなかに手を置いてるじゃないですか」

「す、すまん！」

「別にいいですよ。逆にそのままにしておいてください」

「お、おう。でもいいのか？凜も好きな男がいる年頃だろ？」

「…鈍感ですね」

「なんかそれ七海にも言われたな…。ふう…もう寝るわ」

「ふふっ、おやすみなさい」

俺は凜の暖かさもあり、すぐに眠ることができた。

おまけ

私は我ながらはしゃいでしまった気がする。

とは言ってもこれは全部兄さんが悪いんです。あんなさりげなく優しくするのは反則です…。

「むにゃ…、すう…」

「はふう…可愛い寝顔ですね…」

私は後ろを向いて兄さんの顔を見ると自然に笑みが出た。

起きているときは料理を教えてくれたり頭を撫でてくれたり優しいのに、この無防備な寝顔は反則的に可愛い。

…まあ少し他の女の人に優しくすぎるのは困り者ですが。

「でも…こんな風と一緒に寝るのは私の特権です」

「のふっ！？…むにゃ」

「危ないところですね。あまり強く抱きつくと起きてしまいますね」

私は力を緩めて兄さんの方を向いて抱きついた。

これなら今日は快眠ですね…。

こうして私も眠りに付いた。

第九話：宗佑の眠れぬ夜／朝山凜の場合／（後書き）

なんだか部活疲れでおかしくなった作者です。

まさか自分でも考えていない新キャラができました。ええ、想定外です。

それに凜もすごい豹変しましたね。驚きです。

ちなみに新キャラの綾子さんの髪型はトゥハート2の春香さんのイメージが近いです。

ご意見、ご感想の方は遠慮なくどうぞ。

第十話：宗佑の眠れぬ夜／朝山夕菜の場合（前書き）

最近は更新が遅くなったので早めにと善処しました。
まあ内容がグダグダになったらスイマセン…。

第十話：宗佑の眠れぬ夜／朝山夕菜の場合

俺はいつも通りの携帯アラームで起きた。

時間は六時ちよつと前に設定してあるため、もし凜が起きたら不機嫌になるんだろうな…。

「凜…？」

「んうゝ！」

よし、これならぐっすり寝てるな。

俺は抱きついていている凜をゆくりはがすと、自分の部屋で制服に着替えてキッチンで料理を始めた。

今日は残り物があまり無いので弁当のおかずは作っている。

「ふあ…。やっぱちよつと眠いな」

「ただいまあゝ…。そーすけ起きてるう…？」

「母さん？今回は結構早かったんだね」

いつの間にやら母さんが帰ってきていた。

だがおかしい。いつもならデザイナーの仕事で五日間は絶対に忙しいはずだ。

それが三日で帰ってくるなんて…。

「聞いてよあゝ、おかーしゃん酔っちゃったんだあゝ」

「それは見れば分かるけど…。とりあえず早い理由を教えてくださいな」

い？」

「えつとねえ…。今回は私の出番がちょっとしかなかったんだ。それで早かったのだ！」

「…それで不機嫌になってヤケ酒か。とりあえず水飲んで部屋で寝なよ」

「ふあゝい。そーすけ運んで」

「…はあ。分かったよ」

そう言つて俺は母さんに水を飲ませてから母さんの部屋まで運んだ。まあ小柄で酔つてたから全然辛くはなかったけど。

結局母さんを寝かした後に急いで朝食と弁当を作ったせいで疲れた…。

そしてみんなを起こしてから朝食を食べて学校に向かった。

学校で授業を受けて休み時間になった頃、俺はなぜか同じクラスの男子Aに呼ばれた。

確か高田だったか？高田は悩んだような不安なような顔で俺に質問をしてきた。

「なあ…、朝山つて上と下に二人ずつ姉妹がいるんだよね？」

「おう。別に隠すことじゃないからな。それで本題はなんだ？」

「じ、実は、な。俺はお前の姉ちゃんが…好きなんだ」

「ふうん…、ん？姉ちゃんってどっちだ？」

「ほら！いるじゃねえか！クールビューティーな姉ちゃんがさ！」

葵ねえか。そういやコイツって葵ねえのこと見たことあったか？
まあストーリーキングしてねえならいいが…。

「そんで？俺はどうしろと言っただ」

「お前が連絡取ってくれよ！連絡取れるのはお前だけなんだからさ！
！このとおりだ！」

「って、土下座すんな。分かったから顔上げろ」

そう言う和高田は目を輝かせて喜んでいた。
俺はその姿を遠目で見つつ葵ねえに連絡を取るため、携帯にかけてみた。

『もしもし？宗佑からは珍しいな。何か用があるのか？』

「いや、俺じゃなくてクラスの男子なんだけど。替わっていい？」

『…宗佑じゃないのか。まあいい。仕事もあるから早くしてくれ』

「うん。ゴメンね。…ほれ、今繋がってるから」

そう言うって俺は高田に携帯を渡した。

高田は「お、おう」と緊張した面持ちで携帯を受け取った。

「も、もしもし。俺は宗佑君と同じクラスの高田吉輝たかだよしてるです！」

『そうか。いつも宗佑が世話になってるな』

「と、とんでもない！むしろ俺が世話になってます！」

『そうなのか。で、私に用と言うのは何かな？』

「それは、すーはー…。あなたのことが好きです！付き合ってくださいませんか！」

おー、大胆な告白だな。

クラスの奴だけじゃなくて廊下の奴も野次馬に来てるじゃないか。

『…すまない。私には思い続けている人物がいるんだ』

「そ、そうですか…。ゴメンなさい、いきなりこんな事言って」

『いや、その気持ちがあれば私以外の人物は振り向くさ。君はまだ若いんだからがんばれよ』

「は、はい！ありがとうございます！！」

高田はそう言う俺に携帯を渡した。

目には涙を溜めて、だがすっきりとした顔をしている。

「ありがとな朝山！じゃ、俺はちょっとトイレ行ってくる！」

「おう。次はがんばれよ」

「言われなくても!」

高田は走って野次馬を押しつけてトイレに行った。
…同情しない方がいいだろう。

『宗佑?もう切っていいか?』

「あ、うん。仕事がんばってね」

『ああ。宗佑も勉強をがんばれよ』

そう言って葵ねえは電話を切った。

野次馬たちも終わったのかと言って自分達の教室に戻っていった。
なんだか気疲れしそうな休み時間だったな…。

それから高田は四時間目の途中で帰ってきて、目の周りは真っ赤になっていた。

今日も一波乱あつたが無事に家に帰ってこれた。

このままじゃ俺に被害が来ると考えるとかなり怖い…。

「はあ…、だが今日を乗り切れば自分の部屋で寝れるんだ…。がんばろう」

俺は考えを前向きにして調理にかかった。

今日は葵ねえが仕事で帰って来れないので一人分少ない。

「そーちゃん！今日は私の番だね！」

「…そーだな。その前に飯作らせろ」

「分かった〜。じゃあね〜」

何事も無かった様に夕菜は自分の部屋に戻っていった。
結局その後も何度か俺の元に来て、同じ質問をしては部屋に戻っていた。

「よし…。できたな」

「できたの？じゃあみんなを呼んでくるね！」

「…夕菜は気配を消して背後に立てるのか……」

俺は妹の妙な才能に驚きつつみんなの分をよそい始めた。
今日は葵ねえが仕事でいなくて母さんは二日酔いでずっと寝てるので四人分だ。

久しぶりに少人数で食べたからか、妙に静かに感じた。

と言うより夕菜が一人で騒いで、美咲ねえと凜が静かに怒っていた。

「ごちそーさまー！そーちゃんそーちゃん！分かってる？」

「分かってる。風呂はもう入れたから勝手に入れ」

「わーい！じゃあ待ってるからね！」

「……………ちっ」

「……………二人とも怖いよ」

結局夕菜は凄いスピードで晩飯を平らげて風呂に行った。

そして静かな二人のオーラに押されながら俺は晩飯を食った。

みんなが食べ終わってから、俺は洗い物をして洗濯をし、風呂に入った。

「はあ…、今日が金曜だから…明後日は七海との約束だな」

俺の学校は土曜は休みだ。ゆとり万歳。

俺が土曜まで学校に行ったらまた過労でバタンキューだろう。

「ヤベ、のばせてきた。そろそろ上がろう」

そう言っただけ俺は浴槽から出て扉を開きバスタオルを取った。

そして頭から体の順で拭き、寝る格好に着替えて廊下に出た。

「あー気持ちよかつて「ちえい！」のわあっ!？」

「なんとお!? 避けるとは!」

俺にいきなり上段回し蹴りをしてきたのは夕菜だった。

しかもジャンプまでして俺のコメカミを狙ったな!?

「そーちゃん避けちゃだめだよ!」

「避けるわ! なにトチ狂ってんだ!」

「あのまま気絶すればいいものを…。ならば正攻法で！」

そう言つて俺は懷に飛び込んできた夕菜の頭を掴んだ。
一瞬動きが止まったと思えば、いきなり腕を振り回した。

「やーん！放してよー！」

「お前みたいな危険なやつを離すわけないだろうが」

「ううゝ失敗したゝ」

「失敗？なにをしようとしたんだ？」

「何つて…！勿論！気絶させてそーちゃんを私の思うがごとく…」

「さて、早く寝るぞ。お前は頭がおかしくなったんだ」

「やーん！」

俺は頭を掴んだまま階段を上がつて夕菜の部屋に来た。
今日は凜と交代で、凜が俺の部屋で寝ている。

「ほれ、早く寝ろ」

「えー、そーちゃんも一緒に寝る？」

「ああ。俺は眠いからな」

「じゃあさ。ベッドで仰向けになつてくれない？」

「…？勿論そのつもりだが？」

俺は言われたままにベッドで仰向けになった。
すると俺が寝転んだところを見てか、夕菜は俺の上にかぶさるよう
にして寝転んだ。

「わぁーい。そーちゃんが近あい」

「お、おい！いくらなんでも近すぎるって！」

「別にいいじゃん。私はこうしたいのー」

俺が夕菜をどかさうとすると夕菜は俺に抱き付いてきた。
ちよ…、前向きだと俺が色々と意識してしまう…！

「ん？どうしたの？顔が真っ赤だよ？」

「な、なんでもない。頼むから上は妥協して横にしてくれないか？」

「い・や・だ・よ それに眠いなら寝れば気にならないよ」

「でも…、あーもういい！寝返りうつたときに落ちてても知らないか
らな！」

「はーい じゃあお休みい」

俺は少し体が熱いことは無視して寝る努力をし始めた。

すると人間とは不思議なもので、案外すぐに眠ることができた。

はあ…明日は自分の部屋でゆっくり寝よう…。明後日は約束がある
し。

おまけ

そーちゃんは私の言葉を受けて本気で寝てしまった。
もうちょつとお話したかったな…。

「すう…」

「…昔から寝るのは早いよね。なんでだろ」

私は少し考えてみると結論にたどり着いた。

そーちゃんはいつも私達が寝るときから朝ご飯とお弁当を作ってるんだ。

「そつか、だから早く寝てるんだね」

「ん…」

「ひゃ、ひゃわー?! いきなりすぎるよお…」

そーちゃんは寝苦しかったのか、私を抱きしめて寝返りをうつた。
そのときに抱きしめた場所が背中とおしりだったから変な声がでちゃったよお…。

「んっ…」

「うにゅ…、案外気持ちいいかも」

勿論おしりを掴まれたからじゃないよ。勘違いはNGだよ!!
今度は普通に抱きしめてくれたから気持ちよかった。

「ふぁ…そーちゃんの匂いだぁ…。んにゅ」

私はそーちゃんを抱きしめて眠りに付いた。

はぁ…、これはクセになっちゃいそ。

第十話：宗佑の眠れぬ夜／朝山夕菜の場合（後書き）

なんか執筆中に思ったんですが、夕菜が変態化してない？

思ったよりブラコン度が高くなっちゃった夕菜ちゃんでした。

次回は宗佑の解放された土曜日ですね。

ご指摘、ご感想の方は随時お待ちしております。遠慮なくどうぞ。

第十一話：つかぬ間の休息？～前編～（前書き）

ヤバい…構想が…固まりません…。

次は七海とのデートなんです…。

それにまだ卒業シーズンで働かされたせいで疲れて眠い。

第十一話：つかぬ間の休息？～前編～

俺は今日、携帯のアラームではない方法で起きた。

俺がなぜ起きたか。それは携帯のメール音で起こされた。

…大差ないのは気にするな。

「うん？アラームの直前でメールが来たのか…？」

俺は携帯を開いてメールの差出人を見た。

差出人は俺にとっては天敵になりえる人物である綾子さんだった。

『今から公園に来て。来ないと襲うわよ』

「…………ええ！？なに最後に危険な文足してんだよ！！」

「うにゆう…？朝から元気だねえ…？」

俺が一人で騒いでいると夕菜がむくつと起き上がった。

「起こしたか？まだ早いし休みだから寝てていいぞ」

「う…ん。そ、するう…」

幸い夕菜はまだ眠気が残っていたのですぐに眠ってくれた。

俺は部屋に戻ってパーカーを羽織り、走って公園に向かった。

俺は走りすぎてクタクタの状態で公園にたどり着いた。
すると前に俺が座っていたベンチに綾子さんは座っていた。

「ぜえ…ぜえ…。お、お待たせしました…」

「お、早かったわね。メールしてから五分以内で来るなんて」

「ど、どうも…。それで…用はなんですか？」

「用？別にないわよ。ただ会いたかっただけ」

そう言われた瞬間、俺は膝から崩れ落ちた。

まさか崩れ落ちるとは思わなかったから自分でもびっくりした。
そしてそのまま重力にしたがって体が後ろに倒れていった。

「あら？大丈夫？」

「はい…、ただ気が抜けました…」

「ふうん。今って動けない？」

「動けますけど動きたくないですね。しんどいですし…」

「ふうん…、今なら宗佑君は動けないと…」

綾子さんはニヤリとなにかを企んだ笑いをすると俺の上にまたがろうとした。

まさかマウントポジションを取られるとは思わなかったので俺は体を動かした。

しかし体力が底を尽きかけている俺はコロツと転がって避けた。

「むっ…！動けないって言ったじゃない…！」

「誰でもマウントポジションは避けるわ！」

俺は立ち上がってジャージについた砂を払ってパーカーも脱いで払った。

そしてパーカーを羽織って綾子さんに向きなおした。

「ナマイキね。宗佑君は黙って私の思うがままになればいいのよ」

「俺に人権はないのか！？」「スキあり」へあっ…！」

「ほれほれ。お姉さんに抱きしめられた感想はどう？」

正直言つて理性がヤバいつす。

俺の方が背は高いと言つても綾子さんも女性にしては高身長だ。つまり俺の胸板のところに綾子さんの柔らかいのが当たっていたりするわけで。

「ふふっ、宗佑君も男の子なのね。顔が真っ赤よ？」

「なっ！？そ、そりゃ赤くなりますよ…」

「へえ…、もしかして欲情してるのかな？」

「そ、そんなわけあるか…！」

そう言つて俺は後ろにバックステップで下がった。

綾子さんはスニーカーだったのでコケたりせずにバランスをとった。俺は多分かなり顔が赤くなっていたと思う。すげえ顔熱い…。

「はははっ！ゴメンゴメン。さすがにからかい過ぎたわね」

「はあ…、せつかくの休みに疲れてるのはなぜだ…？」

「そう落ち込まないでよ。ほら、ジュース買ったげるから」

「別にいいですよ。それより帰っていいですか？そろそろみんな起きるんで…」

「そっか、そっか、そういや家事をやってたんだっけ？」

「そうですよ。そろそろ朝食がいる人に朝食を作らないといけないので」

「ふうん…。ねえ、私もいつていい？と言うより朝ご飯食べさせて」

俺は多分拍子抜けしたと言うかポカーンとしてたと思う。
一瞬反応速度が遅れて呆けていた。

「え？でも、綾子さんはちゃんと用意してないんですか？」

「女が全員料理はしないのよ。私はできるけど面倒なタイプよ？」

「なんか後付けみたい…」なにか言った？「ナンデモナイデス。タベテキマス力？」

「ええ。それと私はトマトが嫌いだからヨロシクね」

怖いなあ…、葵ねえに負けない威圧だ…。

まあ葵ねえの友達だし類は友を呼ぶとも言っし。

俺は自分の中でそう考えて終わらした。

そのまま俺は綾子さんを連れて自分の家に戻っていった。

道中なにもなく家に着いたので俺はキッチンで料理を、綾子さんはリビングでくつろいでいる。

今日は一応サンドイッチを作っておこうと思っていたので作っている。

綾子さんのリクエスト？であるトマト抜きの野菜ハムサンドも作っている。

「ふう…結構多めに作ったな…。まあ時間が経っても軽くつまめるからいいか」

「宗佑くん。朝ご飯できた？」

「今できましたよ…。よし、皿に盛ったし運ぶか」

俺は皿に盛ったサンドイッチをリビングの机に運んだ。
すると綾子さんは俺にむかって驚愕の表情を浮かべていた。

「な、なんで…。なんで女の私より上手なのよ！」

「年数の問題です。あ、それとトマト抜きはそっちの一角ですから」

「ありがと。…ってはぐらかさないでよ！」

「ちゃんと答えは出しましたよ。年数の問題です」

「う…。まあ私も一人暮らしは二年目だけどね…、私にもプライドが…」

綾子さんは下を向いてブツブツと念仏のように呟きだした。

なんか後ろにマンガで見るような落胆のイメージが見える気がする。俺は腹が減ったので綾子さんは自然治癒に任せてサンドイッチを食べた。

「ムグムグ…。あ、コーヒー淹れよ」

「もういいわ！食べよ！あつ、私はブラックでね」

「分かりました」

俺はキッチンに戻ってインスタントを二つ淹れた。

綾子さんはブラックだが俺は朝はミルクを入れる派なのでミルクを入れた。

二つとも淹れたのでマグカップを二つ持ってリビングに戻った。

「どうぞ。今日はインスタントですが我慢してくださいね」

「別にいいわよ。コーヒーなんてよっぽどじゃないとマズくないし」

「そうですか。それならよかった」

「そんな質問するってことは家にコーヒーにうるさいのがいるの？」

「うん…。別にそこまでじゃないですけど葵ねえですかね？」

「やっぱり！葵は料理が苦手なのに味にうるさいのよね！」

「そうなんですか？俺は別にそこまで見えませんが」

俺が答えると綾子さんはまたムスツとしだした。

そしてコーヒーを一口飲んで答えてくれた。

「……宗佑君は料理が上手なのよ！しかもこの味は並の喫茶店よりおいしいわよ！」

「そんな大声出したらみんな起きちゃいますって…」

「別にいいわよ！見つかったら宗佑君の彼女だって言うから！」

「それは俺にとって危ない選択肢だ！頼むからやめてください！」

「イ・ヤ・よ 世の中には既成事実って便利なものがあるのよ」

「なにする気だ！？とにかく思いとどまってください！」

「はははっ！冗談よ、ジョ・ウ・ダ・ン」

はあ…よかったあ…。

それよりみんな起きてないよな…？

さすがにこの状態で起きてきたら勘違いされかねん…。

すると今まで気付かなかったが、玄関からリビングに向かう足音が

聞こえてきた。

「ただいま。今帰った、ぞ…」

「あ、おかえり…。葵、ねえ…。？」

「宗佑。ちょっと話があるから私の部屋に來い」

やっべえなあ…。

まさかこのタイミングで仕事から帰ってくるとは…。

葵ねえの仕事が長引いたことを忘れてた…。

「お、久しぶり葵。元気してた？」

「お前…綾子か！？また宗佑を拉致しにきたのか！」

「そう構えなくてもいいじゃない。今日は宗佑君の同意を得て上がってるわよ」

「……そうなのか？」

「うん。今日は散歩してたら偶然会ってね。朝は作るのが面倒ってことで来てるんだ」

前は朝早くからどこに行ってたかで叱られたから綾子さんと会ったことは言っていない。

俺は比較的に嘘のときに表情にでないから大丈夫だとは思うが…。

「…そうか。それで多めにサンドイッチが作ってあるわけだな」

「そうよ。ちなみにトマト抜きもちゃんと作ってくれたわよ」

「まだトマトが嫌いなのか。あれほど好き嫌いは治せと言っただろう」

「別にいいわよ。好き嫌いで死ぬワケじゃないし」

「はあ…もついい。着替えてくる」

そう言つて葵ねえは自分の部屋に戻つていった。

まあそれからは想像できる通り、葵ねえと綾子さんが話をしていた。途中で俺は自分の部屋に戻れと言われて戻ったがなにかあったのか？

第十一話：つかぬ間の休息？～前編～（後書き）

なぜか朝の話だけで一話使っちゃいました。

書く前は全然アイデアが浮かばないのに書いているうちに浮かんでこうなりました。

とりあえず旧友との再会ですね。

次回は後編。宗佑に平和な休息のひとは訪れるのか！こっご期待。

ご指摘、ご感想の方は随時お待ちしております。ご遠慮なくどうぞ。

第十二話：つかぬ間の休息？～後編～（前書き）

タイトル通り後編になります。

前回は登場人数が少ないので前後編に分けました。
眠いので意味不明になっていたらすいません…。

第十二話：つかぬ間の休息？～後編～

俺は葵ねえに言われて部屋に戻ったが、なにせやることがない。ヒマでしかたないので俺は一回読んだ小説を読み始めた。

ちなみに読んでいるのは「もしドラ」だ。これが結構面白い。

「……………」

「そーすけえ〜。おかーさんだよ〜」

なるほど、そう言う考え方もあるな。
いや、この本はなかなか侮れないな…。

「……………」

「そーすけ？ねえねえ、聞いてるう？」

「……………」

「ひつぐ、ねえ…そーすけえ…」

なるほどなあ…。

これは考え方でマネジメントの捉え方は変わるんだなあ。

「……………」

「うう…、無視しないでよあ…。そーすけえ」

俺はもしドラを読んでいると肩を揺さぶられた。

そして栞を挟んで揺さぶった人物を見ると今にも泣きそうな顔を
した母さんだった。

「ど、どうしたの！？なんでいきなり泣きかけなの！？」

「そーすけのせいだよお…。うええええええん！」

「えー！？えー！？俺のせい！？一体なにがあつたんだ！？」

俺がなぜ泣きかけなのか聞いたら突然泣き出してしまった。
一旦俺は母さんを慰めつつ理由を聞いてみた。

「さっきから呼んでたのに…。うう…ひつく…」

「あ、そう言うことが。ごめん、俺ずっと本に集中してたから…」

「うう…、おかーさん…嫌いじゃない？」

「うん、嫌いじゃないよ。だから泣き止んで。ね？」

「…うん。ありがとそーすけ」

母さんは俺にありがとと言うと泣き疲れたのか、すやすやと眠っ
てしまった。

なんだか普通に赤ん坊みたいな寝かただな…。

俺は母さんをベッドに泣かせてからリビングに下りていった。

「そっぴや時間はもう昼だな。今日の昼飯は炒飯でいいや」

「宗佑…？おはよう…？」

「美咲ねえ？もしかして今起きたの？」

「うん…。今日は休みだからな…」

「もしかして二度寝するの？」

「うん…。てか超眠いし」

「そう、じゃあおやすみ。休みの内に生活リズムが狂わないようにね」

「うん、別にだいじょうぶ。おやすみい…」

どうやら美咲ねえはリビングに水を飲みに行っただけのようだなにもなかったと言うことは綾子さんは帰ったんだろう。

俺はリビングに降りてキッチンに立ち、早速炒飯を作りだした。

「あ、サンドイッチでハム使いきってる。今回は卵だけでいいか」

「そーちゃん！今日のお昼はなあに！」

「夕菜？そーいやりつ起きたんだ？」

「ん？ずっと前から起きてるよ。それがどつたの？」

「いや…、俺が起きたときには寝てたからな」

「起きた後は部屋でゴロゴロしてたもん。凜ちゃんは学校に行って生徒会だよ」

なるほどね。……ん？

じゃあ凜は俺と綾子さんが居たこと知ってるんじゃないか？
まさか変な勘違いして怒ってないよな…。

俺が中華鍋に気をつけつつ考え事しているとリビングの扉が開いた。

「…ただいま」

「おつかえりー！おろ？なんか不機嫌だね」

「そう？私はそんなに怒ってないわ。勘違いよ」

「ん？ま、いつか」

「おかえり凜。炒飯作ったけど食べる？」

「…ええ、いただきます。少し多めに持ってください」

「珍しいな。凜は比較的少食なのに」

俺がそう質問すると凜は爽やかなのに怖い笑みを浮かべて振り返った。

そして俺の元までスタスタと早足で近づいてきた。

「ええ。兄さんが年上の女性を家に連れ込んでたせいで朝は食べなかったの」

……怖え。

なぜか年上と女性だけにアクセントを加えてたのが気になるが、そ

れより怖い。

春の陽気が気持ちいいリビングのはずなのに冷や汗が止まらないよ……。

「ねえ兄さん？朝いた女性是谁なんです？」

「えーと、ね。綾子さんは……葵ねえの友達だよ？」

「なんで疑問文で答えたんですか？それに姉さんの友達と兄さんに
なぜ関係が？」

「友達は本当です！綾子さんとは昔にちょっとあったんです！」

「昔にですか……。まあ兄さんがトラブルに巻き込まれやすいのは知
ってますし」

「（た、助かった……のか？）じゃ、じゃあ炒飯できたいし食べようか」

「やったあー！炒飯だあー！」

「ふう……言っただとおり私は多めでお願いします」

「はいはい。じゃあ座って待っていてくれ」

俺は三人分の炒飯を盛った後、リビングのテーブルに運んで三人で
食べた。

予想通り夕菜がおかわりをしていたので多めに作ってよかったと思
う。

三人が食べ終わってから洗い物をして部屋に戻ってもしドラを読
んで時間を過ごした。

まあ母さんがまだ寝てたから勉強机で読むことにした。

俺が本を読み出して数時間経ったところ、母さんが「うにゃー!」!」
と言って飛び起きた。

まったく意味が分からないだろう。俺だって分からないさ。

「どうしたの?いきなり叫んで」

「猫に…猫に…、猫にいじめられたあ…」

弱っ!母さん弱すぎるだろ…。

なんで猫にいじめられるんだよ…。夢だけど。

まあ夢にうなされて威嚇したんだろう。

「それで猫を威嚇したんだね。それとおはよう」

「うん、おはよー。そーすけのベッド気持ちいいねー」

「そう?多分みんなと同じだと思っけど」

「はふう…、また寝ちゃいそ」

「寝るな。寝てもいいけど自分の部屋で寝ろ」

「そーすけのけちんぼ。いーもん、部屋に戻るから!」

母さんは寝起きでふらふらの足つきで部屋に戻っていった。

……さて、続きを読むか。

こうして俺の休みは本を読むことによって過ぎていった…。

第十二話：つかぬ間の休息？～後編～（後書き）

なんか内容は短いですね…。

次回はもつとがんばりますんで許してください！

ご意見、ご感想は随時受け付けておりますので遠慮なくどうぞ。

第十三話：日曜日の約束（前書き）

ちよつとの間書けなくてすみませんでした。

まあ書けなかった理由は活動報告を見てくれれば分かります。

第十三話：日曜日の約束

昨日は我ながら平和な一日を過ごしたと思う。

平和な時間とはあつという間に過ぎて、今日は七海との約束の日だ。俺は先に昼飯を作り置きしてから駅前に向かった。

そして走って駅前に向かったので若干早くついた気がする。

「うゝん…、もしかして早すぎたか？」

「あ、宗たん！こっちこっち」

俺の前方から声が聞こえたと思えば、声の主は七海だった。宗たんなんて呼び方で呼ぶから俺に注目の視線が当たっている。

「お前はその呼び方やめろ。すげえ注目されてるし」

「じゃあなんて呼ぶの？宗助君…は堅苦しいし、やっぱり宗たんていいや」

「一人で納得すんな。…まあいいや。今日はどこ行くんだ？」

「えーとね、最近できた遊園地に行こっかなーって」

あー、確かそんな感じの話がクラスであつたな。

俺は興味なかったが確か隣町だっけ？

「さあさあ行こー！もたもたしてたら時間がなくなるよ！」

「のわあっ！？腕をそんなに強く引っ張るなって！」

こうして俺たちは電車に乗って隣町に向かった。
電車の中は休日だが遊園地に向かう客でそれなりに混んでいた。
まあすし詰め状態ではなかったので結構楽しかった。

ところ変わって遊園地のゲート前。

俺たち二人はゲートの前にできた行列に並んでいた。

「むうー！足疲れたあー！！」

「我慢しろ。まだオープンして日が浅いんだ、混んでるのは当たり前だ」

「でも疲れた！」

「我慢しろっての……。……。あ、列が進んだぞ」

「やっとかあ……」

俺たちはチマチマと進んでいる列に数十分並び、やっと入場できた。
入場するなり七海は俺の腕を引っ張ってジェットコースターの列まで走らせた。

俺たちはギリギリで優先パスを買えたのでアトラクションはストレスフリーで乗れる。

「よし、今日は景気付けにこれからだー！」

「マジかよ…。絶叫系は俺二ガテなんだが…」

俺がそう言つと七海はこちらをキラキラした目で見た。

いつもの猫のような可愛げな目ではなく、いたずら好きな子供がなにか企んだ目だ。

「にしし！ならなおさら乗るよぉ！そして次はフリーフォールだ
——！！」

「な、てめ…。俺の二ガテなアトラクションばっか…」

「にししし！宗さんの約束じゃなんでも言うこと聞くんでしょ？」

「……………分かったよ。いくらでも付き合つてやる」

「よし！じゃあ一番前を陣取るよー！！」

こうしてしばらくは俺の二ガテなアトラクションが続くことになった。

結局ジェットコースターが一番前に乗ることになり、俺は終始放心状態になっていた気がする。

正直怖い。お化け屋敷とかより怖い。

「ふいふ…。あー楽しかったー！」

「あー…、マジ怖かった……」

「よし、それじゃ次はフリーフォールだ。優先パスでスイスイ行くよー」

「勘弁してくれ……」

俺は今日から遊園地に行くときは優先パスは買わないことを心に決めた。

フリーフォールはあの特殊な足の浮遊感と風圧を嫌というほど味わって終わった。

終わったあと俺は足は歩く感覚が鈍いからフラフラだった。

「いやー絶景だったね。すごい高いから遠くが見れたし」

「お前の心臓にはワイヤーが生えてるのか？普通ならそんな感想はない」

「そうなの？私は普通に楽しめたよ？」

「俺は終始体をシェイクされたことしか頭になかった」

「まあ慣れだよ慣れ。じゃあ次はバイキングね」

そう言って七海は千鳥足みたいな俺を引っ張って連れて行った。

多分これ以上絶叫系に乗ったら平行感覚がなくなると思う。

俺が抗議する間もなくバイキングに連行され、体が吹っ飛ぶかと思う体験をした。

俺はバイキングから降りたときには顔がグロッキーになっていた。

「おえ…気持ち悪う……」

「もー。男の子なのにだらしないよ」

「俺は体の外は丈夫でも中身は繊細なんだよ。お前みたいに頑丈じゃねえんだって」

「むっ！失敬な！私だって繊細な女の子だよ！」

「はいはい。そんじゃ次はなんだ？」

「んじゃあ次はあっち！！」

そう言つて七海は俺を連れまわした。

俺たちは乗っていないアトラクションに乗ったり、もう一回乗ったりして時間を忘れて遊んだ。

ふと気づくと空は夕日でオレンジ色に染まり、園内にいる人もまばらになっていた。

「お、もうこんな時間か。七海、もう帰るか？」

「え…。あ、うん。もうこんな時間なんだね…」

俺が帰るかと聞いた瞬間、七海は驚いた表情をした後に悲しげにつぶやいた。

そんな顔をしている七海が放っておけず、再び声を掛けた。

「で、どうする？俺は今日一日は七海の言いなりだからな」

「っ！うん！じゃあ最後に観覧車行こっ！！」

俺が言った一言に七海は笑顔を取り戻して観覧車へと俺を引っ張った。

俺たちがいた場所は観覧車に近い場所にいたのでかなり早めに乗る

ことができた。

観覧車に乗ってから数分。俺たちは一言も話していなかった。

「……………」

どうしよう…超気まずい……。

俺たちは互いになにも話さずに観覧車に乗っていた。

すると静かなのが我慢できなかったのか、七海が話を振ってきた。

「ね、ねえ。宗たんって彼女いるの？」

「はあ！？いきなりだなお前…。まあいいけどさ」

「そっか。……………なら私にも」

「ん？どうしたんだ？」

「あ、あのね！宗たんに聞いてほしいことがあるんだけど！-」

「お、おう。できればもう少し落ち着いてくれ」

俺は七海のテンションを落ち着かせると、話はなにかと聞いてみた。
すると七海は頬を少し赤く染めて話をはじめた。

「あの…ね？宗たんって彼女はいないんだよね？それじゃ気になつて
る人とかは…？」

「あー、いないな。考えれば考えるほどに俺って青春してねえな」

「ふう…よかったあ……………」

「よかつたつて…。俺は全然よくねえんだが」

七海は俺の話は聞いてなかったようで、ずっと深呼吸をしていた。そして意を決したような「よし！」を言った後、俺の方を見た。

「あ、あの…。私は宗さんに入学式の時から一目惚れしててね、ずっと伝えるタイミングを見失ってたんだけど…。よ、よかつたら私を宗さんの彼女にしてくれませんか!!」

俺は普通に驚いた。

七海のこととは嫌いじゃないし、むしろ好きだ。

だが俺は七海とは『仲のいい女友達』だと思っていたし、七海からも『仲のいいクラスメート』と思われると思っていた。

だが、いざ告白を受けてみると通常の三倍は七海が可愛く見える。俺が内心でそう思っているということは俺も七海にどこか惹かれていたんだろう。

俺が色々と考察しているうちに、七海は目に涙を浮かべて立っていた。

「うう…、やっぱりヤダよね…。こんな我儉な子に「ち、違う!!」っ!？」

「俺も無意識に七海に惹かれていたんだと思う。だ、だから…俺でよければ「嬉しいっ!」のわっ!？」

俺は返答をしていると七海に飛びつかれた。

そして七海はぎゅっと離さないように俺に抱きついた。

「うう…、嬉しいよお……。ひぐっ…えぐう…」

「ええ！？なんで泣いてるんだ！？と、とりあえず泣き止め。な？」

「だって嬉しいんだもん……！それは今日の約束とかじゃなくて本心だよな？」

「当たり前だ！さすがに冗談で付き合ったりはしない！」

「じゃあ私も抱きしめて？宗たんばかりズルいもん」

俺は七海にそう言われてゆつくりと七海の背中に手をまわした。そして強すぎないように、でも離さないように抱きしめた。

「はふう……、宗たんテクニシャンだね」

「言いようによつては危ない発言はやめろ」

「ん？宗たんなに考えたの？私は別に深い意味はないよ？」

「なんでもない。それよりいつ離れるんだ？」

「もうちょつと……。いや、あと一時間「お疲れ様でした……」、お邪魔しましたー」ひゃわっ！！」

七海が和んでまだ抱きつくと言おうとしたときに観覧車の扉が開いた。

観覧車が一周回ったから従業員は空けたんだろう。……すげえ気まずそうにしてたけど。

俺たちは急いで降りて、閉園直前だったのでこの遊園地から外に出た。

「はあ…、恥ずかしかったあ……」

「まあ体勢的に俺が襲われてる感じだったしな。まあ気にするなつて」

「で、でもお…。恥ずかしいのに変わりないよ…」

「それなら俺は観覧車で七海の行動の方が恥ずかしいと思うぞ？」

「い、言うな〜！せつかく忘れてたのにい〜！」

「ま、可愛かったしいいじゃん。さて、帰るか」

「う、うん。………宗たんが可愛いつて言ってくれた!？」

駅まで歩いていると七海はかなり驚いた声を上げた。
そして俺の腕をグイッと引いて俺の歩みを止めた。
てか引かれた左腕が痛い…。

「ねえ！さっきの本当!？今までなら言ってくれなかったのに!!」

「本当だつて。まあなぜか言いたくなつたんだよ」

「ふむ…これが恋人効果……。な、なら私のことも名前で呼んで！」

「じゃあ真央。そろそろ帰らないと門限破りで怒られるんじゃないか？」

「ああつ!!そうだった、早く早く!!」

「引つ張るな…って、言っても聞かないな……」

こうして俺の日曜日は過ぎていった。

まさか真央からの告白は想定外だったが、結果として付き合えてよかった。

俺もどこか内心では惹かれていたんだ。今思えばなぜ気づかなかつたんだと思う。

さて、帰ってから晩飯のことをどう言い訳するかな……。

第十三話：日曜日の約束（後書き）

プロットを全部書き直したんですがどうでしょうか？

とりあえず書き溜めた分は投稿しようかなと思って投稿しました。

……まあ心なしベタな展開っばいですが。

そしてこれからは修羅場編に突入！ご期待ください！！

MTさん。感想ありがとうございます！！

いただいた応援のおかげでかなり書く気が出ました。

これからも読んでいただければ幸いです。

ご意見、ご感想は随時受け付けております。遠慮なくどうぞ。

第十四話：デートのその後（前書き）

少しの間放置していてすいませんでした。
放置していた理由はただ書きたくない衝動に駆られたんです…。
ふざけた理由で放置してすいませんでした。

第十四話：デートのその後

俺は言い訳を考えつく前に家に着いてしまった。
さて、どう言い訳したものか…。

「ただいま」

「おかえり。随分と遅い帰宅だな」

「げ…、葵ねえ…」

こう言っではなんだが、今は一番会いたくなかった。
だって言い訳はすぐにバレるし。

「私は今日も仕事でいなかったが、私が帰ってきてもないのはおかしいと思うぞ？」

「今日は友達と遊んでたんだ。つい長引いちゃったけど…」

「そうか、なら私からは別に言うこともない」

「そう？じゃあすぐにご飯作るから待っててね」

そういつて俺は逃げるようにリビングに向かった。
そしてリビングの扉を開けた瞬間。俺にタックルが飛んできた。
後ろに倒れることはなかったが少し吐きそうになった…。

「遅いよそーすけ！！お母さんを餓死させる気だったの！？」

「うう…、そんな気はないよ…。それより離れてくれない？」

「うん、分かったあ。……ねえそーすけ？」

「ん？どうしたの？ご飯なら今から作るけど…」

「ううん、違うよ。なんでそーすけから女の子のおいがするの？」

この人の嗅覚は犬並みじゃないのか？

確かに真央とは接触したが、真央もそんなにキツイ香水を使ったりはしていないはずだ。

なのに嗅ぎ分けるとは……。

「さ、さあ…？俺はそんなに女の人に接触はしてないし…」

「嘘はダメだよ宗佑。ちゃんとお母さんに話しなさい」

ヤバい。本格的に説教モードじゃないか。

しかもリビングの扉の前だからテレビを見てる美咲ねえにちらちらと見られてるし。

とりあえずこの場には美咲ねえしかいなくて助かったな。

「い、いや…。実は遊んだ中に女の子もいたんだよ。そのときに触れたんじゃないかな？」

「お母さんは嘘は嫌いだよ。ちゃんと本当のことを言いなさい」

「う、うう…。なんと言ったらいいのか……」

このまま俺は真央と付き合ったからと言えはすぐに済むだろう。

だがそれを言った瞬間、俺に不幸が降りかかる気がする。
さて、本当にマジでどうしたものか……。

「あ、あのですね……。なんと言いますか……」

「ん？ やつと話してくれるようになった？」

「えーと、実は今日は女の子と遊びに行きまして……」

「「はあ！？」」

「ひいつー!!」

俺が今日のことを少し話すと母さんだけでなく美咲ねえまで反応した。

それはいいんだが、まさか「はあ！？」と言われるとは思わなかった……。

俺、そんなに大声で言っただけなのに……。

「へ、へえ……。それで続きを聞かせて？」

「宗佑お前……！！なんか変なことがあったならシバく!!」

母さんは動揺するだけで終わったが美咲ねえは俺に確実に危害が加わるな……。

さて……、どう切り抜ければいいんだろうか？

「えーと、まあ遊びに行っただけです。それだけです」

「ほ、本当に！？それだけなの！？」

「う、うん。それだけだよ?」

「なんで疑問形なんだ!!絶対キスでもしたんだろ!!バレバレだ!!」

「なぜバレ…てないな!!うん!!じゃ、俺は部屋に戻るから晩飯は出前を取って!!」

俺は走って部屋に戻り、扉のカギをかけた。

そして寝る用意に着替えてベッドですぐに眠りについた。

扉の向こうから「出て来い!!ボコボコにしてやる!!」と聞こえたのは冗談ではないだろう。

第十四話：デートのその後（後書き）

久々に書いてみるとグダグダ感満載ですね…。

次回は翌日の話。つまりは戦線離脱後の朝と学校の話になるのかな？

きゅりのきゅーちゃんさん。感想ありがとうございました。

話の長さは自分でも自信が無かったので、ちょうどいいのなら安心しました。

これからもこの小説をよろしく願います。

ご意見、ご感想は随時受け付けております。遠慮なくどうぞ。

第十五話：波乱の幕開け（前書き）

今回から本格的に修羅場編に突入です。
はたして私の文才で修羅場をうまく書けるのだろうか…。

第十五話：波乱の幕開け

俺は普段ならもう起きている時間に目が覚めた。

結局昨日は美咲ねえの怒号のせいで眠れたのは夜もかなり更けてきた時間だった。

そのせいで起きるのが遅くなったんだと思う。

「ふあ…、まだ眠いけど朝飯と弁当作らないとな……」

俺は素早く制服に着替えてからリビングに向かった。

遅くなったとは言いつつも普通の高校生には早すぎる時間だ。

俺はちゃっちゃと朝飯と弁当を作った後、机に座って昨日の言い訳を考えだした。

「やっぱり言い訳が難しいよなあ…。ああ…逃げなきゃよかった……」

「なにが逃げなきゃよかったって？なあ宗佑？」

「……………オ、オハヨウゴザイマス」

「おはよう。それで、昨日はなんで逃げたんだ？ん？」

ヤバイ…今回はガツシリ肩をつかまれた……。

さて、どうやって言えば何事も無く終わるだろうか…。

「えっと、その、なんと云うかですね。かくかくしかじかです」

「とりやつー!」

「いだあ！？なんでグーパンチなの！？」

ピンタならまだよかったのに…。

まさか誤魔化したらグーが飛んでくるとは…。

「真面目に答えろ！！アタシは…心配なんだ…！！」

「心配？なんで昨日のことを美咲ねえが心配するの？」

「そりゃあ…アタシは…宗佑が」

「ん？俺が？」

「えっ！？そ、そりゃ…今は関係ない！！早く話せ！！」

さすがの俺でもグーを準備されたら脅されてるようにしか見えないよ。

しかも顔が真っ赤になってるから下手なこと言ったらブン殴られそうだ…。

…もう、本当のことを言っただけで楽になるのかな…？

「えっと…これから言うことを言ったら殴らないでね？」

「その言ったことによる。殴らないかもしれないし殴るかもしれないな」

「じゃあとりあえず逃げないから俺の正面のイスに座ってくれろ？」

「…？ああ、分かった」

こうしてなにか分からずに美咲ねえは俺の正面のイスに座った。さて、これで間合いは十分だから対処できるかな…。

「美咲ねえはさ。もし俺が告白されたらどうする？」

「え…。そ、そりゃ…祝福してやるよ！！……うん」

よ、よかったあ…！！

もしシバくなんて言われたら逃げてた…。

よし。これで安心できたし、正直に言うか！！

「実は昨日真央と一緒に遊園地に行ったんだ。あ、真央って言うのはこの前教室で紹介した子ね」

「ああ、あの能天気そうな女か。アイツと一緒に行ったのか？」

「うん。それで最後に観覧車で真央に告白されたんだ」

「え……？」

その瞬間に美咲ねえの顔が驚きで固まった。

そして声が震えながら美咲ねえが俺にたずねてきた。

「へ、へえ…、それで、どうしたんだ？」

「あ、うん。俺はそれを受けたよ。まだ実感はないんだけどね…」

「え…？そ、そうなのか…。へえ…よかった、な」

「うん。実感は沸かないけど大切にするつもりだよ」

俺がそう言つと美咲ねえは下を向いて黙ってしまった。
美咲ねえがこんなことになるのは初めてなので俺はびっくりしている。

「み、美咲ねえ？どうしたの？」

「今日は学校休む。だからほつといてくれ」

「え？ちょ、待って…」

俺の言葉も聞かずに美咲ねえは部屋に行ってしまった。
その後はみんなを起こしてから、俺は学校に行った。
母さんが終始睨んでいたのはかなり怖かった。

俺は学校に着いて、教室に向かっていると背中に誰かが抱きついてきた。

いきなりだったので前に倒れそうだったがギリギリ耐えた。

「やつほー！ぐつもーにん宗たん！！元気がないよー！！」

「お前の元気に比べたら低いだろうよ」

「ぶー…。真央って呼んでよぉ」

「はいはい。真央は元気すぎるんだよ、そろそろ疲れてきたから離

れてくれ」

そう言うのと素直に離れて俺の横に並んだ。

改めて周囲を見ると驚きの目と恨みの目のどれかで見られていた。真央はそんなことは気にしないと云わんばかりに話してくる。

「そっけないなあ…。はっ！まさか倦怠期と言うのはこれか！？」

「早すぎるだろうが。俺はただ朝だからテンションが上がらないんだ」

「なんだあ、よかったよかった。ちなみに私に倦怠期は訪れないよ！！」

「遠まわしな言い方だな。…まあ、ありがとな」

俺は少し照れつつ真央の頭を撫でた。

すると猫のように目を細めて撫でられるがままになっていた。さすがにこのままでは遅れるので撫でるのをやめた。

「ぶーぶー！撫で時間が短いぞー！」

「学校の中なのに遅刻してもいいならいいが、どうする？」

「なんと！？さ、早く行こうー！」

「はいはい。分かりましたよ」

学校内にいながら遅刻は誰だっていやだろう。

俺たちは遅刻することなく教室にたどり着いた。

まあ真央がずっと撫でるとさかっただのは言っまでもないだろう。

第十五話：波乱の幕開け（後書き）

なんだか今回は美咲が可哀想な回ですね。

そして短い回でもあります。しかも終わり方が不自然だし…。

次回は帰ってからの出来事みたいな感じかな？

疾風迅雷さん、やまだんさん。感想ありがとうございます。

まさか感想が一人ではなく二人だとは思わなかったので見たときはびっくりしました。

これからも読んでいただければ幸いです。

ご意見、ご感想は随時受け付けております。遠慮なくどうぞ

第十六話：波乱は沈静する…のか？（前書き）

最近アイデアが全然出てこない…。
これはスランプでないと思いたいなあ…。

第十六話：波乱は沈静する…のか？

突然だが俺は今とても大変なことになっている。

俺が学校から帰って玄関の扉を開けるところまでは大丈夫だった。だが玄関を開けた瞬間、俺の体は宙を舞い、廊下のフローリングに叩きつけられた。

この家でこんなことができるのは一人しかない…。

「いつてえ…。なにするのさ葵ねえ…？」

「理由は宗佑が一番知っているはずだ。試しに言ってみてくれ」

「ヒントもなしじゃ無理だよ…」

「そうか。ならヒントをやるう。なぜ美咲が部屋で閉じこもっている？」

美咲ねえは朝からずっと閉じこもってたの！？

さすがに昼には出てくると思ってたのに…。

美咲ねえが閉じこもった理由…。俺が告白されたことを言ったから…？

「もしかしたら…。俺が真央と付き合っていることを話したから？」

「ほう…。そんなことがあったのか。美咲は宗佑以外と口を利かないと言い張っているな」

「なっ…。もしかして俺は嵌められたの？」

「そういう言い方もできるな。とりあえず詳しく話してくれ。そうしないとどうもできない」

俺は倒された体を起こし、葵ねえに朝の出来事を話した。
弁護士の仕事の癖のためか時折状況を整理するように問いかけてきた。

俺はそれにも嘘偽り無く答え、全てを話し終わった。

「なるほどな。それで美咲は極度のショックで閉じこもったのか」

「うん。…やっぱり俺のせいになるのかな？」

「話を聞く限りでは宗佑が加害者で、美咲は被害者だろうな。まあそつとも言いにくい部分もあるが」

「でもやっぱり俺のせいだね…。……よし、俺は美咲ねえに謝ってくるよ！―！」

「それが賢明だろうな。では謝って解決したら夕食を作ってくれ」

「うん。とりあえず終わったら、ね？」

「ああ。ことがややこしくなる前に行け」

俺は葵ねえに背中を押されて階段を駆け上がった。
そして美咲ねえの部屋の前に行き、扉を二回ノックした。

「…美咲ねえ？入ってm「来るな！！あっち行けバカ！！」…頼むよ」

「イヤだったらイヤだ！！入ってくんな！！」

扉の向こうから聞こえてくる声はいつもよりも弱弱しかった。それにずっと泣いていたのか、時折鼻をすすする音や泣き声が漏れてきている。

「じゃあ入らない。でもここからなら話を聞いてくれる？」

「……………分かった。そこなら……………別にいい」

「ありがと。じゃあいきなりだけどゴメンなさい！！」

俺は扉の前で思いつきり頭を下げた。

少し頭を打ったがこの際関係なんてない。とにかく謝るんだ。

「俺は普通に話していたつもりだったんだけど、いつのまにか美咲ねえを傷つけていたみたいで…。とにかくゴメンなさい！！」

「え……………？なんで謝ってるんだよ…。アタシが勝手に落ち込んだだけじゃねえか……………」

「その勝手に落ち込む前には絶対キツカケがあったと思うんだ。多分それは俺のせいだし……………」

俺がそういうと美咲ねえの部屋が少し開いた。そこから毛布で体を覆った美咲ねえが顔をのぞかせた。目は赤く充血して涙の後が顔には残っていた。

「……………入ってこいよ。宗佑なら……………別にいい」

「ん、ありがとね」

俺は承認も得たので部屋に足を踏み入れた。

するとベッドの周りにあったものは投げられたのだろう。辺りに散乱している。

ガラス類は投げられてなかったので足を切ったりはしなそうだ。

俺はベッドに座るように言われたのでベッドに座り、美咲ねえは隣に座った。

「なあ…、宗佑は今の彼女について楽しいか？」

「うん。楽しいか楽しくないかでいうと楽しいよ」

「そっか…。アタシとはどうだ？……やっぱ楽しくないよな」

そう言つて美咲ねえはどんよりとしたオーラを纏って落ち込んだ。まったく…。楽しくなきや家族なんてやってないよ。

「楽しいに決まってるよ。ていうか楽しくなかったらもう家を出てるよ」

「ふえ…？そ、そうなのか？」

「当たり前じゃないか。俺はいても楽しくない人に飯を作ったりはしないよ」

「う、うう…。よかったあ…よかったよお……！！」

俺はぴったりと抱きついて泣きじゃくる美咲ねえの背中をさすりながら宥めた。

普段とは違って弱気で俺に甘えてくる美咲ねえは姉というより妹に見えた。

美咲ねえを宥めて数分。やっと落ち着いたようで俺から離れた。

「よし！こんなことでクヨクヨしてられないな！！まだ奪い返せるんだ！！」

「…？なにか取られたの？」

「鈍感な宗佑は関係ない！ていうかお前だ！！アタシはシャワー浴びてくる！！」

「んえ！？鈍感な俺が取られたから奪い返すのは俺！？どういうことだ！？」

俺は残された言葉にかなり困惑していたが、あまり気にしないことにして部屋を出た。

そして俺はリビングの扉を開けてリビングに入った。

すると踏み出した足に二つの物体が突撃してきた。

「いつでえ！？な、なんだあ！？」

「ヒドいよそーすけ！！二日間も晩ご飯を作ってくれないなんて！！」

「そーちゃん！！今日は絶対に晩ご飯作ってもらうからね！！」

「作るから離せって！！いだだだだ！母さんもスネに頭を押し付けないでくれ！！」

「「じゃあ晩ご飯作って!!」」

「作るから!!作るから離してくれ!!」

そう言うつと食欲で生きていると言っても過言ではない二人は足を開放した。

それにしても痛かった…。まさか体じゃなくて人体の急所であるスネを狙うとは…。

「さて…、そろそろ作り出すか……」

「あ、兄さん。私も手伝います」

「お、助かる。ありがとうな」

「お礼を言われるようなことじゃありません。……………それに、彼女さんのことをじっくり聞かせてくださいね」

凜は全て知っていたのか!?

まさか葵ねえのように部屋で話ではなく、料理中に聞くとは…。俺は若干戸惑いながらキッチンで食材を調理し始めた。

「で、兄さんはいつの間に彼女さんと付き合いだしたんです?」

「……………なんで凜が知ってるんだ?」

「そりゃあ通学路や帰り道で女性に抱きつかれていましたし。さすがに友人の域は超えていると思っただけです」

だから俺と真央が付き合っていることがバレたのか。

確かに通学路も俺の高校と途中まで一緒だし、帰り道も生徒会で遅くなれば高校と同じになるか…。

「話を戻しましょうか。いつ、彼女さんができたんですか？」

「この前の日曜日に俺は出かけてただろ？そのときにな」

「……………チツ、やっぱり後をつけていれば」

「ん？なんか言ったか？」

「いえ、別になにもありませんよ。……………まあ料理のときは私が独占できるからいいですね」

なんか凜がブツブツと呟いていて怖い…。

俺は落ち着かないまままで料理を作り、完成したのでリビングのテーブルまで持っていった。

そのときの母さんと夕菜の喜びようだったらすごかったな。

こうして葵ねえと美咲ねえを呼んできて、久々に家族全員で夕食を食べた。

第十六話：波乱は沈静する…のか？（後書き）

初めて葵に弁護士らしいことをやらした気がする。

そして美咲は無事回復。そして新しく凜が黒くなっちゃった…。

次回からは凜がキーキャラになるのかな？

雷神さん。タクティスさん。感想ありがとうございました。

これからも読んでいただければ嬉しいです。

ご意見、ご感想は随時受け付けております。遠慮なくどうぞ。

第十七話：静かな対抗心（前書き）

最近は学業の方が忙しくて書けませんでした…。
まあ私も三年なのでこんなことするなと言われそうですが…。

第十七話：静かな対抗心

あの三咲ねえの事件から数日が経ち、何事もなく毎日は過ぎていった。

まああんなに色々起こるのが日常って言うのも考え物だけど。

そんなこんなでもう五月にも入ってきて梅雨が近くなってきたので、地味に暑くなってきた。

俺はそんな地味に暑い中、教室という擬似サウナで授業を受けていた。

「であるからして……。蒸し暑い！！なぜこんなに蒸し暑いんだ！！」

「梅雨が近づいとるからに決まっとるやん」

勇敢にもイライラしている遠藤先生にツッコんだのは関西出身の宇のだいすけ
野大輔だ。

クラスの中ではムードメーカーを務めている少しバカな男子だ。髪は染めて金髪でワックスでウルフヘアにしている。そして高身長。

怖いもの知らずなのかバカなのかは知らないが、イラついている遠藤先生にもツッコむ奴だ。

「なあ宗やん？さっき変なこと思わんかった？」

「知らん。それと宗やんはなんだ？初耳だぞ」

「いやあ宗やんの愛しの彼女の呼び方が宗たんなら宗やんでもええかな〜ってな」

「…まあいいか。勝手にしてろ」

「言われんでもするで」

「俺の授業中に私語たぁいい度胸だな…。ええ？」

俺と宇野が教壇に体を向けるとそこには鬼が経っていた。

元々身長が高くて筋肉もある人なので、怒りで鬼に見えてしまった。

「俺は関係ないですよ。先に話をしだしたのは宇野のバカです」

「それはヒドいで宗ちゃん！？しかもバカって足さんでええやん！！」

「なら四角形の面積の公式は？」

「そんぐらい分かるで。四角形は縦×横÷2やろ？」

「残念。四角形は2で割らなきゃ正解だ」

「……みんなそんな目で見んといて」

おそらくクラスの皆が宇野のことを見てたんだろう。

しかもこの高校は簡単ではないはずなんだが…。

「なら宇野のバカはあとで職員室に来い。なんか色々心配になってきた」

「バカをつけて呼ぶんやめてえな…」

「まあ真実は変わらん。受け止めろ」

「…もしかして宗やんは僕のこと嫌いなん？」

「嫌いではない。むしろ好きだぞ？」

俺がそう言った瞬間、クラスの女子の数名から黄色い声が上がった。そして真央と思わしき声で「ライバルが男の子！？なんだか色々複雑だよ！？」と聞こえた。

…もしかして俺が告白したノリになってるのか？失礼な。

「もちろん友人としてだ。俺に男色の趣味はカケラもねえ」

「えゝ、僕は別にええのn冗談やって！だからそんなゴミを見るような目で見んといて！！」

「まあいいか。で、先生はいつ授業を再開するんですか？」

「再開したが暑いからやる気が起きん。だから後は自由にしろ」

こうして遠藤先生の授業は自習に変わったので各自が自由にしたした。た。

さて、俺はなにをしたものか…。寝るか。

俺は腕を枕にして寝る準備をして…、

「宗たん！！」

「いだあつ！？」

鼻を強打した。すげえ痛い…。

おそらく真央が俺を呼びにきたついでに背中を押したんだろう。そのせいで自分の腕に鼻を勢いよくぶつけてしまった。

「いってえ…、いきなりなんだ真央？」

「ん？そうそう！宗さんは宇野君と私のどっちが好きなの！？」

「真央に決まってるだろうが。俺に男色の趣味はないと言ったのを聞いてなかったのか？」

「…聞いてなかった。そんなこと言ってたっけ？」

「言った。まあこうして確認できたならいい」

「そだね～。そう言えば付き合いだして時間も経ったねえ…」

「まだ五月だろ？そんなに経ってないだろ」

「経ったの！！私はご飯とお風呂のとき以外は考えてるんだよ！！」

「それは考えすぎじゃないか？……ん？どうなんだ？」

それからは自習を真央と話ながら時間を潰した。

そして次の授業からは遠藤先生の様には行かず、普通に授業になった。

そこからは淡々と授業を受けて、真央と一緒に帰宅しだした。

俺と真央は一緒に並んで帰宅していた。
夏も近づいてきたからか、まだ空は明るい。

「はぁ…最近はずし暑いな…」

「だねえ。最近はずも多くなってきたし」

「洗濯物が濡れないようにしないとな」

「そんなこと気にする高校生は宗たんぐらいじゃない？」

「まあそつかもな」

俺たちが他愛もない話をしていると、前方に見知った人影が見えた。
短めのポニーテールを揺らしながら歩いているのは凧だろう。

「生徒会で遅くなったのか？」

「どうしたの？宗たんって生徒会に入ってたっけ？」

「いや、前に歩いてるのは妹だったからな。この時間に帰宅してる
ってことは生徒会だろうと思ってる」

「宗たんの妹！？なら会いに行こうよ！！」

「え、ちょ、引つ張るなって！」

俺は真央に引つ張られて凧の方まで連れて行かれた。
凧はいきなり人が前に現れて驚いていたが、俺の姿を見ると納得し

たような表情をした。

「いきなり前に現れないでください。びっくりするじゃないですか」

「おお、宗さんに似てクールだね！可愛い」

「ちょ、いきなり撫で回さないでください…」

「おい真央、凜が困ってるから離してやってくれ」

「はい」

俺が声をかけると凜を撫で回すのをやめて俺の横まで来た。

凜は真央のテンションについていけずに困っているような感じた。

「ごめんな凜。真央はこういう奴なんだ」

「大体分かりました…。で、何か用ですか？」

「なにも用はないよ？ただ凜ちゃんが見たかっただけ」

「そうですか。なら私はこれで」

そう言って凜は俺の横を通って家に帰っていった。

うーん。なんであんなに機嫌が悪かったんだ？

「…嫌われちゃったのかな？」

「いや、凜は静かなタイプだからな。ちょっとびっくりしたんだろ」

「そうかな？　なんだか静かな殺気が感じ取れたんだけど…」

「お前はどこの殺し屋だ。そんなわけないだろうが」

「むう…、まあいいや。じゃあ私はこっちだから！」

「おう。じゃあ明日に学校でな」

「りょくかい。じゃーにー！」

こうして俺は真央と別れて家に向かって歩いた。
にしても凜から殺気か…、勘違いだろうな。

俺は気にしないようにして、今夜の晩飯のことを考えて歩いた。

第十七話：静かな対抗心（後書き）

この小説には男の友人が少なかったので新キャラを出しました。
そして今回はやや日常編になりました。： 修羅場を期待してた方は
スいません。

次回からはちよつとずつ修羅場っぽくするつもりです。

それと一応追記ですが、私は男なのでBLに興味はありません。勘
違いはなさらぬようにお願いします。

ご意見、ご感想は随時受け付けております。遠慮なくどうぞ。

第十八話：一言で始まるゝ前編ゝ（前書き）

今回はまたまた前後編に分けちゃいましたが、自分の中では修羅場っぽくしたつもりです。

もしかして違うかもしれませんが、そればかりは私の文才を呪ってください…

第十八話：一言で始まるゝ前編ゝ

俺は真央と別れてから家に帰って晩飯を作り出した。

もちろん凜も手伝ってくれているが、見て分かるほど不機嫌オーラを出している。

……もしかして、真央のやったことを怒ってるのか？

「あのゝ、凜…さん？」

「はい？なんですか？」

「なんでそんなに不機嫌オーラを出してるのでしょうか…？」

「さあ？自分で考えてみたらどうです？」

うう…不機嫌と認めてるだけ余計に怖い…。

やっぱりあのことが？真央の撫で回しが原因なのか…？

「考えてばかりでなく料理に手を回してください」

「お、おう。了解しました…」

俺は注意されたので料理を再開した。

最近は凜もクールになってきてさみしいなあ…。

俺はさみしいと思いつつ晩飯を作り終わり、リビングまで運んだ。そしてリビングにいなかった人を呼んで晩飯を食べだした。

「相変わらずそーすけのご飯はおいしいねえゝ」

「最近は凜も手伝ってくれてるから凜にもお礼を言ってね」

「そーなの？凜ちゃんもありがと」

「別に…お礼を言われることでは……」

「む？凜ちゃんがテレてるなんて珍しい…！」

「夕菜うるさいわよ」

「なんだか最近はずっと平和に食事ができていいな…」。

「一時期は色々あってゴチャゴチャしてたからなあ…」。

「ん？どうした宗佑？目なんかつぶって…」

「いや、一時期は色々ごちゃごちゃしてたなあって思ってたね」

「そうだな。……宗佑が恋人を作ったせいで」

「あ、葵ねえ？なんでいきなり箸を握り締めてるんですか…？」

「おっと…。なんでもないさ」

「絶対なにもないわけないよね！？」

「まさか俺に関係してるのかなあ…？」

「安心しろ宗佑。アタシは宗佑を守ってやる！」

「み、美咲ねえ…！」

「その代わり代価として一日の自由をもらっ！」

「リスクが高すぎない!？」

「ずるーい!じゃあ私もするー!」

「夕菜も!??っていうかまだ決まってるからな!」

「えー。残念だなあ」…」

なんだか最近は美咲ねえが優しい代わりにおかしくなってるよ…。まさか俺の自由を一日要求されるなんて…。

しかも飯に夢中だった夕菜も反応するなんて…、おそろしいツープアだ…。

「むぐむぐ…、ごっくん。お母さんが食べてる間になにがあったの?」

「い、いや…。えっと…最近の社会情勢と政治のあり方について話してたんだ」

俺はもしかしたらバカかもしれない。

こんな騙し方なら母さんでもさすがに…、

「お母さんむずかしいのキライ!!」

さすが母さん。期待を裏切らないな。

まあ母さん以外は騙せてないので「なに言ってるんだ?」という顔をされている。

……でも凜だけは黙々と飯を食べ続けている。

そして凜は俺が見ていることに気づくと、箸を置いてこちらを向いた。

「そういえば彼女さんとは仲がいいですね。通学路で抱きつかれますし」

その瞬間、場の空気がピタツと止まった。

その中で凜だけが箸を持ち直して飯を食べるのを再開した。だが凜以外の四人はそれぞれが色々な顔をしている。

さて…、今回はどんなことを起こすつもりなんだ神様……。

第十八話：一言で始まるゝ前編ゝ（後書き）

今回は短くてスイマセン…。

なんせ私は来年受験なので隙を見て投稿しているものでして……。とりあえず勉強もしなくてはならないので更新スピードは若干落ちるかもしれませんが、隙を見て投稿するつもりです。

B R I S S I N G R さん。 M T さん。 ご感想ありがとうございます。そして小説中毒さん。 ご指摘ありがとうございます。

ご指摘のあった葵の弁護士の年齢については修正いたしました。これからも読んでいただければ幸いです。

ご感想、ご指摘は随時受け付けております。 遠慮なくどうぞ。

第十九話：一言で始まるゝ後編ゝ（前書き）

久しぶりに投稿！！

まあGWなので時間は微妙にあったんですが、構想が固まらなかったのでできなかった…。

まあなんやかんやで投稿です。

第十九話：一言で始まるゝ後編ゝ

凜以外の箸が完全に止まってから数秒、この空間が止まった感じがした。

そして一番最初に動いたのは意外にも夕菜だった。

……まあ不機嫌なオーラを出しながら飯にがつっているだけなんだが。

「お、おい。そんなに慌てたら気管に入るぞ……」

「そんなの関係ないよ!!」

「……………触らぬ神に祟りなしだな」

夕菜はとりあえず放置しておくとして、問題は他の三人だ……。

他の人が見たら何事もなさそうだが俺は分かる。すげえ不機嫌だ……。

俺が心の中で戸惑っていると、母さんがチヨイチヨイと腕をつついてきた。

「ねえそーすけ？さっきの話ホント？」

「え……？ま、まあ……たまにそうなることも……」

「へえ……、ていつ！」

「うおっ！？なんで頭を叩いたの!？」

「しーらない。そーすけはずっと考えればいいんだよ」

え、なにこれ？

なんで肉親から微妙なイジメを受けてるんだ！？
まあ俺のせいなのは絶対なんだろうけど…。

「やっぱり原因は登校中の出来事だよなあ…」

「だよなあ…じゃねえ！付き合うのは許すとしても抱き合うのは許さねえ！！」

「美咲ねえの基準が分からないよ…」

「うつせえ！とにかく許さないからな！！」

「許さないって…、じゃあなにすればいいのさ」

「え？え、え〜と…考えてない……」

「じゃあ考えてから言つてよ…」

なんだか美咲ねえは最近考えることを忘れてる気がする…。

いや、忘れてるというか…、少しボケてる？

というか良い表現が見つからないな…。

「あ、思いついた！宗佑の自由を「それは私が許さん」口出しすんなよ葵！！」

「お前は宗佑の自由を奪ってどうする気だ」

「色々する」

「……………お前はもつと勉強した方がいいんじゃないか？」

「なにい！？確かにアタシはこの家じゃバカかもしれないが、学校じゃまあまあだぞ！！」

「前回のテストで補習になったのはどこの誰だ？」

「アタシじゃない！！アタシは赤点ギリギリで補習は夕菜だ！！」

「ちょー！私のことまで巻き込まないでよー！！」

夕菜…補習だったんだな…………。

確か前回のテスト勉強は俺と葵ねえに教えてもらってたような…。

「ほう…、それはそれで詳しく聞きたいが今はいい。で、テスト勉強はしたんだろうな？」

「……………してない。で、でもテストなんか将来必要ないしいいじゃねえか！！」

「テストは必要なくてもどの学校を出るかは将来必要になる」

「くう…！り、理屈ばっか並べてんじゃねえ！！」

「知るか。私は普通に正しいことを言っただけだしな」

まったくその通りだな。

それより美咲ねえって成績悪かったんだなあ…。

てつきり部屋にいるときに机でなにかしてたから勉強してたと思っ

てたけど。

じゃあ美咲ねえは机でなにやってたんだ？

「ねえ。美咲ねえは机でなにやってたの？」

「ん？そりや学校の宿題に決まってるだろ。机でするなんてそれぐらいしかないだろ？」

「へえ、でも宿題は返ってきたら残念な結果だったと……」

「う、うるせえ！お前らは父さんに似たから頭がいいんだ！アタシたちは母さんに似たから頭が悪いんだよ！！」

「ひ、ひどおい！お母さんの方が頭いいもん！！あの人は……バカじゃ、ないけど」

「ほら見ろ！アタシたちの思考回路は母さん寄りで、お前らは父さん寄りなんだよ！！」

「ん？遺伝ってそこまで似るものだったっけ？」

「どうだったかな？専門分野ではないからよく分からんな」

むむむ…、葵ねえでも分からないなら俺は分からないな。

まあ葵ねえは弁護士だし、母さんはデザイナーだし、父さんは営業だし。

そついや最近父さんから電話が掛かってこないな…。どうしたんだろ。

まあいい。後で掛けてやるか。

「宗佑？何をぼんやりとしているんだ？」

「ん？いや、なんでもないよ。久しぶりに父さんを思い出したなあ
って」

「ダメえ〜！！あの人は私たちの汚点なの！忘れなさい！」

「ひどい言われようですね。元とは言え旦那だった人に」

「凜ちゃんもダメっ！！」

「そう言えばなんで離婚したの？私は一番下の子だからよく知らないんだけど…」

そうか。凜は赤ん坊で夕菜はまだ母さんのお腹の中か。

俺もそんなにはつきりは覚えてないなあ…。どうだったんだっけ？

「うう〜、みんななんであの人の話ばかりい〜！もうヤダ！！
ごちそーさま！！」

そう言っただけを一気に食べて母さんは部屋に帰った。

そして微妙な空気の中、葵ねえが思い出したように手を叩いた。

「そうか。やつと思い出したぞ」

「どうしたの？」

「いや、なぜ母さんと父さんが離婚したかを思い出してな」

「え！？ホント葵お姉ちゃん！？教えて教えて〜」

「そうか。凜や夕菜は数回しか会ったこと無かったか」

「うん。だから教えて」

「それは私も聞きたいです」

凜と夕菜の要望もあり、葵ねえは話を始めた。

「あれは冬頃の夜だったかな？私たちが家で晩御飯を食べているときに父さんが帰ってきたんだ。そのときに父さんはかなり泥酔していてな、そのときに離婚のキツカケを作ったんだ」

「キツカケ？それで決まったんじゃないんだ」

「ああ。そのときに父さんは母さんに向かって言った言葉が、「ただいまー！今帰ったよおめぐみちゃん」だったんだ。それに憤怒した母さんは般若のごとく父さんを殴ったな」

「なるほど。そりゃあ怒られても仕方ない」

「だがこれはキツカケだ。この後も父さんは同じような呼び間違いをした。だから離婚したんだ」

「なるほど…。それは全面的に父さんが悪いなあ…」

俺はうる覚えだったから聞いてよかったな。

離婚話はまあ笑えないが、少しは気になる話題だからよかった。こうしてなんだか笑えない話を聞きつつ俺たちは晩飯を終えた。

その後俺は洗い物をした後に部屋に戻って父さんに電話を掛けてみ

た。

「もしもし？元気にしてる？」

『その声…宗佑か！？なんでお前まで着信拒否にしたんだ！？』

「着信拒否？俺はそんなことしてないけど…」

『嘘だ！！俺が久しぶりに掛けたら拒否されたもの！！』

「ホントに？後で見てみるよ」

『マジでそうしてくれ。そのままじゃ俺は孤独に打ちひしがれて死んでしまう……』

「ウサギみたいなことを……」

『んで、久しぶりに電話なんてどうしたんだ？もしかして母さんとの再婚に手を貸してくれるのか？』

「今日は久しぶりに晩飯のときに父さんが会話に出たからね。久しぶりに電話したんだ」

『マジでか！？で、俺のことなんて言ってた！？』

「母さんはイヤだって言って離脱。そして話は離婚話になっただけだよ」

『うう…、なんで娘たちは古傷を抉るんだ…』

「まあ情けないってなっただけで終了したよ」

『うう…父さんはブローケンハートだよ……。今日はもう寝るね…』

「分かった。じゃあね」

そう言って向こうから電話は切れた。

俺は携帯を充電器に繋いでベッドに横になった。

今思えば父さんに話がずれてくれて助かった。あのままだと俺が被害をこうむることになったし。

さて、やることもないし本でも読むかな…。

こうして今日も色々なことがあったが平和に終わってよかった。

というか高校生が平和な一日を思うなんてなあ…。

第十九話：一言で始まるゝ後編ゝ（後書き）

今回は久しぶりに父親が登場しました。

最近はどういうラストにするかで悩んでおります…。

実際のところ、俺はこの作品をほぼ思いつきでやつちったのでラストまでの大まかな構想が練れてません。

しかもこういう日常系の作品のラストなんて全然知識がありません…。

B R I S I N G Rさん、やまだんさん、p a r o r a m uさん。ご感想ありがとうございます。

今回は感想だけではなく勉強のコツまで教えていただいたりしたので感謝感謝です！

これからも応援よろしくお願いします。

ご感想、ご指摘は随時受け付けております。遠慮なくどうぞ。」

第二十話：突然のキス（前書き）

最近は学校行事関連で忙しいので更新が滞ってしまっ…！
それよりこの作品もいつの間にやら12万PVを突破してました。
最近見てなかったのだからびっくりしました。本当にありがとうございます。
ございます。

第二十話：突然のキス

離婚した理由を聞いたり父さんの着信拒否の謎から数日がたった。そして今日は日曜日。ほぼ全ての日本人は休日を謳歌しているだろう。

俺も休日を満喫しようと思っていた。でも…

「なぜこうなる」

「早く早く！今日は久しぶりの休みなんだから！！」

「俺も休みなんですが…」

「知らないわよ！分かったらついて来る！！」

俺は休日だというのに綾子さんに連れられて隣町まで来ていた。連れてこられた理由はいたって簡単で単純。ただ拉致られたただけだ。前回と同様に俺は公園に呼び出されたと思えば、「来たわね。じゃあ休みだし遊びに行くわよ！！」と言って俺の手を掴んで走り出した。

そして気づけばそこはもう電車の中、後戻りはできなくなっていた。

「ほらほら。ぼーっとしてないで行くわよ！！」

「まあ行くのは構わないんですが、いったいどこに向かっているんですか？」

「遊園地。最近できたって噂を社内で聞いたのよ」

「…ああ、あそこですか」

「ん？もしかして誰かが行ったことあるの？もしかして彼女だったりするのかな？ま、ないか」

「いや、まあ正解だったりするんですが…」

俺がそう言った瞬間、綾子さんの足が止まった。

いきなり止まったのでコケそうになったがなんとか耐えた。

そして俺が顔を上げると綾子さんはこちらを見ながら苦笑いをしていた。

「え？や、やだな」冗談は流すか適当にあしらうのがマナーよ？」

「冗談じゃなくて本当ですよ。そういえば連絡してませんでしたっけ？」

俺がそう言つと綾子さんは下を向いてしまった。

そして微かにだが体が震えている。

俺が声を掛けようとした瞬間、綾子さんが俺の胸ぐらを掴んでいた。

「あ、綾子さん？どうs「聞いてないわよ！！そんなこと！！」…泣いてるんですか？」

ここは幸い人通りの少ない通りだったのでそんなに見られることはなかった。

だが通行人はいないわけではない。チラチラとは見られている。

「聞いてない…、聞いてないわよ……」

「えっと…とりあえずどこかで休みましょう」

「話を変えないで。なんで知らない間に彼女なんているのよ…なんですよ!」

「それに対しては答えが分かりませんよ…」

「じゃあ私の好意には気づいてた? 怒らないから言って」

「…分かりませんでした」

「私だって好きじゃない男の子を連れ去ったりしないわよ。で、彼女のことは好きなの?」

「はい。なんせ俺のことを好きになって、告白までしてくれた子ですし」

「……私だって好きだったのに不公平よ。それなら…」

「ちょ!?! んむう!?!?」

綾子さんが掴んだ手に力を入れたと思うと俺の顔の前には綾子さんの顔があった。

そして俺は顔を離そうとすると綾子さんに頭を抑えられた。

俺は逃げるのができず数秒の間ずっとキスをしていた。その間は俺にとって数分にも感じられた。

「ぷはっ! い、いきなりなにするんですか!」

「……やっぱり離したくない。絶対に、絶対に私に振り向かせてあ

げるから」

「え？それって「じゃあね。呼び出して悪かったわ」ちょ、待っ…」

俺が声を掛ける間もなく綾子さんは走ってどこかへ行ってしまった。でも最後の一言を言った後、綾子さんを見ると恐怖心が沸いたのはなんだ…？

第二十話：突然のキス（後書き）

今回は凄く短くてスイマセンでした。

とりあえず病んだ綾子さんを登場させたかっただけです。

そしてこの話の次からは綾子さんと宗佑、真央の登場が多くなると
思います。

読み専さん。ご指摘ありがとうございました。

自分でも注意はしているつもりですがやっぱり抜けている部分もありますので助かりました。

これからも読んでいただければ幸いです。

ご意見、ご感想は随時受け付けております。遠慮なくどうぞ。

第二十一話：疑惑と仲違い？（前書き）

気づけばこの小説も二十話を超えましたねえ。

……まあ更新速度で言えば遅い部類にはいるんですが。

第二十一話：疑惑と仲違い？

昨日の綾子さんに拉致されて色々あった次の日、俺は学校に向かっていた。

すると前方に真央の姿が見えたので俺はそこまで走っていった。

「おはよう。なんか元気くないか？」

「っ！？」

「お、おい！」

俺が真央の横に立って声を掛けると、驚いた顔をした後に走って行ってしまった。

いきなりのことだったので俺は呼び止めようとしたままで固まってしまった。

……俺は知らない間になにかしたのか？

「おっす宗やん！！…ん？どしたん？」

「あ、いや…。さっき真央に話しかけたら逃げられてな」

「逃げられた？なんでなん？」

「知るか。逆に俺が知りたい」

「…ん？もしかしてあの噂か？」

「あの噂？なぜ噂と俺が関係あるんだ？」

「いや、その噂の中心が宗やんやねん」

噂の中心が俺？なにをしたんだ？

別に学校では目立ったことはしてないが…。

「まあいい。その噂とやらを聞かせてくれ」

「えつとな、宗やんが昨日の昼過ぎに真央ちゃんじゃない女の人とキスしてたって言うねん」

「なっ…！？」

「まあ大半は宗やんがそんなことするわけないって言う тоннねんけどな」

ま、まさかウチの学校のヤツが通っていたのか！？

いや、あのときに俺は通路が見えていたが知ってるヤツは通ってないぞ！？

「情報源は誰だ？今すぐ問いただしたい」

「そんな無茶言ったらアカンで。人の噂も65日って言うやん」

「75日だバカ。まあそれもひとつの手だな」

「バカって言うた方がバカやねんで。それより真央ちゃんの誤解を解いてきいや」

「分かった。あんがとな」

俺は学校に向かって走り出した。
今思えば遅刻ギリギリなのに歩いている宇野はバカなんだろうな。

少し時間が経ち、今は一時限目が終わった休み時間。
俺は一目散に真央の元に向かった。

「おい。ちょっと話いいか？」

「えっ！？い、いいけど…」

「じゃあ階段のとこまで行くぞ。ここじゃ人が多い」

「え、ちよっ！待ってよぉー！？」

俺は半ば無理やり、逃げられないように手をとって階段まで向かった。
一年の教室は校舎の上の階にあるので、俺は屋上の扉の前まで連れてきた。

「はぁ…はぁ…。そ、そんなに急いでどうしたの…？」

「簡潔に言つぞ。俺に対してなにか勘違いをしてるだろ」

「…ん？勘違いなんてしてないよ？」

「え、だって俺が他の女の人とキスをしたって噂が…」

「キスしたの！？そ、宗たんヒドい！ヒド過ぎるよ！…」

「え…？ちょっと待て「待たないよ！なんでそんなことしたの！！」
ちよつと待てつて！」

「ひゃ、ひゃい…」

俺の一喝でなんとか静かにできた。

さて、まずは朝のことから聞いていくか…。

「まずは、なんで朝逃げたんだ？」

「いきなり話しかけられてびっくりしたんだよ。そのときに体が勝手に走っていつちゃった…」

「理性より体が動いたってことか。野生児かよ」

「や、野生児じゃないもん！それより宗たんの話の真相はどうなの
！」

「俺の話の真相はただの噂だ。気にすることはない」

「なあんだ。よかったあゝ」

「俺はただ単に宇野のバカに惑わされただけってことか…」

「でも宇野君には感謝だね」

「感謝？アイツには感謝することはないぞ？」

「だって宗たんは心配してくれたんでしょ？それが嬉しかったんだもん！」

…いきなり妙に恥ずかしいことを言っなよ。
結局俺たちはそのまま教室に帰り、いつもと同じ学校生活を過ごした。

第二十一話：疑惑と仲違い？（後書き）

今回も短いですね…。

次回は少し修羅場っぽい感じに仕上げてみる予定です。

天道 界理さん。ご感想ありがとうございました。

感想にあつたお父さんの扱いをもっと雑にすると言うことですが、あれ以上雑にしても大丈夫なんでしょうか？

あれでも私はかなり雑に扱っているつもりなのですが…。

ご意見、ご感想は随時受け付けております。遠慮なくどうぞ。

第二十二話：拉致騒動再び（前書き）

最近はいくら寝ても寝たりないです…。
そして授業中に寝て怒られるという悪循環があ…。
ということで休みはずっと寝ます。

第二十二話：拉致騒動再び

朝の勘違い事件があったりした放課後、俺と真央はいつも通り寄り添って歩いていた。

俺の噂の件は完全に沈静化したわけではないが、笑顔でいてくれると気が楽になる。

「でね。今度放映の映画のチケットをげつとしたよー！」

「ん？こりゃホラー映画じゃないのか？」

「そだよ。別に私は怖くないから大丈夫だよん」

「そりゃ残念。ビビった顔を見たかったのに」

「えー、宗たん悪趣味だよー」

そうか？別に悪趣味ではないと思うが…。

まあ好きな奴の色んな表情が見たいって言うのもあるんだがな。

俺たちはそんなことを話しつつ歩いていくと、前方に人影が見えた。しかし夕日の逆光のせいで本当に影しか見えない。

そしてその人影は俺たちに向かって歩いてきた。

近づいてきた人影の正体は俺がよく知っている人物だった。

「あら、こんな所で会うなんて奇遇ね。宗佑君」

綾子さんはそう言って笑みを浮かべた。

でも、俺から見たらその笑みには少しの恐怖を覚えた。

「あ、奇遇ですね。綾子さん」

「んえ？宗たん、この人はだあれ？」

「こんにちは彼女さん、私は白江綾子よ。よろしく」

なんだか彼女のところのアクセントが強かったような……。そしてなんだ……。このなんとも言えない気持ち悪い感覚は……。

「ねえ宗佑君。これから時間空いてる？」

「はあ……。俺は大丈夫ですけど……」

「私は別にいいよ。じゃ、また明日ね」

そう言って真央は帰っていった。

そして残ったのは俺と綾子さんだけになった。

「ふふっ、やっと二人になれたわね……」

「で、どうしたんですか？わざわざ待ってまで」

「そうね。長くなるかもしれないし公園で話しましょ」

「そうですか。なら行きましょか」

改めて気がついたがここは公園の近所だった。
なら綾子さんがここにいる理由が納得できた気がする。

俺たちは公園のベンチに座って話をした。

話の内容は意外にも恋愛絡みの相談だった。

まあその相談も友人からされたものらしいが…。

「で、その友人の彼氏が他の子と付き合ってたらしいのよね」

「あー…、結構面倒なことになってるんですね」

「そうなのよ。でね、その女の子は彼を略奪しようかって言ってるのよ」

「そうなんですか。でも略奪なんて面倒になるだけじゃないですか？」

「そうよねー…。もし、彼の方がその子を選んだらどうする？」

「それは…、付き合ってる人がいる状態では難しいのでは？」

「そう…、ありがとね。なんとか答えがでたわ」

「答え？アドバイスじゃなくてですか？」

「ええ。私の答えはこうよ」

そう言って綾子さんは俺の背後に回って首に何かを押し付けた。

その瞬間。俺の視界は激しく揺らぎ、全身の力が抜け、俺は地面に倒れた。

だんだんと薄れていく意識の中で見たものは、綾子さんと青白い電気を放つスタンガンだった。

第二十二話：拉致騒動再び（後書き）

今回は綾子さんの理性がブツ飛んでいますね、まさかこんな展開になるとは作者も思ってたかもしれません。
気がつくとかこんな感じに……。

ご意見、ご感想は随時受け付けております。遠慮なくどうぞ。

第二十三話：脱出と決意

うん…？ここは、どこだ？電気もついてないし…。

俺がそばにあるカーテンの隙間から外を見ると景色は黒に小さい光、夜だった。

ほんの少しの月明かりを頼りに辺りを見渡すと、机に本棚にタンスといった家具が見える。

そして俺が寝転んでいるのはベッド。…普通の部屋か？

「…なんで俺はこの部屋に？」

俺が疑問を呟くと部屋の扉が開いた。

影でしか見えないがおそらく女性。片手になにか持っている？

「あ、やっと気づいた？」

「その声…綾子さんですか？ならこの部屋は…」

「ここは私が借りている部屋の一室よ。どう？いいでしょ？」

「インテリアは分かりませんよ」

「そうじゃないわよ。専門的に見るんじゃないくて宗佑君から見ても」

「まあ、いいんじゃないですか？」

「あら嬉しい。お礼にハグしちゃう」

「え？ちょ、待ってくださ「ダメ」いだあ…！！」

綾子さんが近づきながら手に持っているものを俺の腹部に当てた。そしてカチツという音と共に俺の体に激痛が走った。

「私に反抗したら…お仕置きするから」

「スタン…ガン…？思い出した！！俺はスタンガンで気絶させられて…」

「思い出しちゃった？」

「……悪ふざけで済むレベルじゃないですよ。これは」

「悪ふざけじゃないわ。私は本気、本気で宗佑君を私の物にする気よ？」

「俺は所有物ではありません。帰らせてください」

「ふう〜ん。また、痛いのがいいの？」

「スタンガンは嫌に決まってますよ。だから、力づくですが！！」

「え！？きゃあっ！！」

俺は綾子さんにベッドにあったクッションを盾に突撃した。正直すげえ怖かった。

本気ではないので綾子さんは尻餅をついただけで済んだが、俺は一気に玄関に行つて靴を履き、マンシヨンの廊下を全力疾走した。そしてマンシヨンのロビーから外に出て、しばらくは家に向かって走った。

しばらく走ってから俺は疲れたので歩くことにした。

「ぜえ…ぜえ…。や、やっと…撒いたのか？」

「…ん？宗佑か？こんな時間までなにをしているんだ」

「あ、葵ねえ…！！」

俺は安心感と恐怖感の二つが感極まって葵ねえに抱きついてしまった。

しかも情けなく涙を流しながら。

「そ、宗佑！？ど、ど、どうしたんだ！？」

「会いた…かった…。会いたかったよお…！！」

「なあ！？そ、宗佑らしくないぞ！？……泣いてるのか？」

「ゴメン本当に……。スーツは後で弁償するよ…」

「それはいいさ。で、なにがあっただ？」

「…実は」

俺はさっき遭遇した出来事をそのまま葵ねえに言った。
道端だったが無関係なく、俺は真実をそのまま言った。

「なるほどな。……綾子の奴…！！」

「そうだ。このことは裁判沙汰にしないでほしいんだ」

「…どうしてだ？」

「いや…綾子さんが普通なら、普通ならあんなことはしないと思うんだ。何かがキツカケであんなったんだと思うし…」

「まあ…そうだな。確かに素の綾子は能天気には笑っている奴だ」

「うん。だから、俺を誘拐したってことはキツカケは俺だろうし、俺が話をつけるよ」

「そうか。なら今日は帰るぞ、明日は学校をサボれ。そして一日かけても説得するといい」

「…ありがとう」

俺と葵ねえは家に向かって歩き始めた。

そう言えば晩飯はどうなったんだろう…？まあ、美咲ねえと凜は料理できるし。

大丈夫…かな？大丈夫だと信じたい。

第二十三話：脱出と決意（後書き）

今回はかなり遅れての投稿でした。

まあ色々と事情がありまして…、勉強は勿論ですが母方のおじいさんがヤバいんですね…。

残りは二週間ぐらいって言われたんで、気持ち的にも執筆に向かなかったり。

今回の書き溜めてた。と言うより少しずつ書き足していったものです。

いきなり文章の感じが変わってたりしてなければいいんですが……。

いちごさん。ご感想ありがとうございます。

今日ログインすると感想があっただので書く気になりました。

色々な意味ありがとうございます。

ご意見、ご感想は随時受け付けております。遠慮なくどうぞ。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1044r/>

朝山家の長男のとある物語

2011年9月13日13時48分発行